修訂中等國語讀本

落合直文編
森林太郎
萩野由之補

巻八

375.9
Dc8
資料室

41996
教科書文庫
4
810
41-1912
20000
65217

資料室
375.9
Oc8

修訂 中等國語讀本 卷八目次

一、團結心と家族制……一
二、壇の浦 その一……六
三、壇の浦 その二……一〇
四、修善寺だより（書簡文）……一七
五、外人の觀たる富士……二一
六、自然のあはれ……二六
一、月と露……二六
二、花と月……二七

七、百蟲譜……二九
八、うへ野山（狂歌）……三三
九、戰爭と文學……三五
一〇、爲朝の軍議　その一……四二
一一、爲朝の軍議　その二……四六
一二、奥の細道……五一
一三、木枯（俳句）……五八
一四、日野山の閑居……五九
一五、死と永生……六七
一六、義士討入の模樣を報ず（書簡文）……七二
一七、福澤先生を悼む　その一……七六
一八、福澤先生を悼む　その二……八一
一九、歡樂鄕……九一
二〇、丹波少將……九六
二一、比良の山風（和歌）……一〇三
二二、落花の雪……一〇六
二三、故事二則……一一二
一、塞翁が馬……一一二
二、知音……一一四
二四、光賴卿の參內……一一六
二五、奈良朝の歌平安朝の文……一二六

卷八目次 終

修訂 中等國語讀本卷八

一　團結心と家族制

日本の社會は、一の大いなる家族なり。君は、專制の君にあらず、民は、不平の民にあらずして、國家は、卽ち、父子、夫妻、兄弟を廓大したるものなり。日本上古の風、所謂族制政治を以て成り、家族と國家と、緊密なる關係あり。二者に、大小の差別ありと雖も、そのもとは一物なり。但、ここには、家族制と、君主制とが、社會における出生の先後を論ぜず。これらの發達交渉

の順序は、社會學の說くところにして、余輩の關するところにあらざればなり。ただ、歷史ありてこのかた、聖皇を仰ぐ制と、家族相親む制とは合一して、日本の社會を構成したることを記憶すべし。

而して、盡未來際、國民が、わが大君を仰ぎて仕へまつるが如く、家族の親睦も、一代を限れるにあらず。一代を限れる家族は、强固に結合したる家族と稱すべからず。わが家族は、一系の氏姓、永く、過去未來に涉りて動かず。國家に、天祖あるが如く、一家に、また、氏神あり。氏神は、卽ち、その家を開ける祖先を祀れるなり。代代の子孫、皆、この神の血を分てることを自覺して、同血の眷親、十人も、百人も、ただ一人の如く、家長を中

聖德太子（一二三三年・一二八一年）

心として、その手足の如く働く。家族の、世にある、みな、祖先の賜なることを知り、益、一家の榮達を計るは、自己の爲に止らず、祖先の名を辱めざらんが爲、後世子孫の幸福の爲なりとす。かくして、始めて、箇人の活動は、その死と共に消滅せずして、五尺の血肉の外に、意義あるを見、輯睦せる家族は、集りて、社會を組織し、ここに、和氣靄靄たる國家を成す。

聖德太子の、十七箇條憲法の第一條に、「和を以て貴しとす」といへり。一家の親は、延いて、一國の和となり、君民上下合體して、確立せる理想に向つて進む。但、四季の變遷、その順を違へずといへども、時に、寒暖の、期を失することなきにあらず。社會の秩序の紊るる時あり、民衆の歸趣の蔽はるる時あり

て、國家は沈滯萎靡す。ただ、國民が、全く一體となりて、最も強固に統合せられ、理想の燈、最も明に、その前に輝く時、箇人は、國家の利益の爲に、一死を惜まず、現在を、未來の犧牲として憚らず。國運、ここにおいてか振興す。上古、神功皇后が、韓國を征服し給ひしが如き、その好例なり。

鎌倉幕府の創立は、天皇と、庶民との間に、障壁を築きて、國民、歸嚮するところを失ひ、天下、漸く亂れ來りしが、豐太閤の出づるに及びて、禍亂を戡定し、日光、再び、天に高く、久しく、抑壓に艱みたる希望は、勃然と、頭を擡げて、更に、韓國の征討となりぬ。國民が、一體として活動する時、國運の、最も發揚すること、以て見るべし。或人いはく、「これには、註脚を要すべし。かくの如きは、日本國民に限りての特色にあらずして、世界を通じての、國家興廢の、一般の運命なり」と。然り、この言には、異論なし。さりながら、日本國民の團結力の、殊に強固なるは、なほ、何人も許すところにあらずや。その、人種的天性なるか、または、國土の形勢によって養はれたるものなるかは知らず。とにかくに、古今を通じて、萬國に、比類なきところなり。世界のうち、一國興りて、一國滅び、一朝絶えて、一朝繼ぎ、千年の舊國、老いて、なほ盛なるものなきに、ひとり、わが國が、上下三千載、抑揚波瀾を經て、益振ひ、更に、青年の血氣を回復したるもの、これ、實に、強固なる團結力の賜にあらずや。（藤岡作太郎―國文學史講話）

二　壇の浦　その一

さるほどに、源氏の兵ども、いとど、力を得て、平家の船に漕ぎ寄せ、漕ぎ寄せ亂れ乘る。遠きをば射、近きをば斬る。たて横、散散に攻む。水手かんどり、櫓を棄て、楫を捨てて、船を直すに及ばず、射伏せられ、切り伏せられ、船底に倒れ、水の底に入る。中納言は、女院、二位殿などの乘り給へる御船に參られたりければ、女房たち、「こは、いかになり侍りぬるぞ」と宣ひければ、「今は、ともかくも申すに、ことば足らず。かねて思ひ設けたることなり。めづらしき東男どもをこそ御覽ずらめ」とて、うち笑ひ給ふ。手づから、船の掃除して、見苦しきものども、海に取

中納言　平知盛。（一八一二年―一八四五年）

女院　建禮門院德子。（一八一五年―一八七三年）

二位殿　清盛の後室、平時子。（―一八四五年）

り入れ、「ここ拭へ、かしこ拂へ」などのたまふ。「さほどの事になり侍るなるに、しづかなるたはぶれ言かな」とて、女房たち、聲聲をめき叫び給ふ。

二位殿は、今はかぎりと見はて給ひにければ、練色の二衣ひきまとひ、白袴のそば、高く挾みて、先帝を抱き奉り、帶にて、わが身を結びあはせ參らせ、寶劍を、腰にさし、神璽を、脇に挾みて、ふなばたに臨み給ふ。先帝は、八つにならせ給ひけり。御年のほどよりはねびととのほらせ給ひて、御形あてに、うつくしく、御髮黑く、ふさやかにして、御背にかけ給へる御貌、たぐひなくぞ見えさせ給ひける。御心迷ひたる御氣色にて、「こは、いづこへ行くべきぞ」と仰せられけるこそ悲しけれ。二位

練色の二衣　練色とは薄黃色をいふ。二衣とは、おなじ色の二枚襲をいふ。

先帝　安德天皇。

殿は、「兵どもが、御船に、矢を参らせ候へば、別の御船へ、行幸なし参らせ候ふ」とて、

いまぞ知る、みもすそ河の、流には、
涙のしたにも、みやこありとは。

と宣ひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿、同じくつづきて、入り給ひにけり。國母建禮門院をはじめ奉りて、先帝の御乳母帥典侍、大納言典侍以下の女房たち、船の艫舳に臥しまろび、聲をととのへて、叫び給ふもおびただし。浮きや上らせ給ふと、しばしは見奉りけれども、二位殿も、八條殿も、深く沈みて、見え給はず。昔は、一天の主として、殿をば、長生と祝ひ、門をば、不老と名づけしかども、今は、雲上の龍下りて、忽に、海中の鱗となり給ふこそ悲しけれ。あはれなるかな、花に喩へし、十善の御粧、無常の風に、匂を失ひ、悲しいかな、月にかがやきし、萬乘の玉體、蒼海の涙に、影を沈めおはすること。無常、もとより、さだめなし。有待、誰かは、たのみあるなれども、清涼紫宸の玉の臺を振り捨てて、鬪戰兵革の船中に行幸して、いまだ、十歳にだにも滿じ給はぬ御齡に、忽に、波の底に入り給ひけむ、あはれといふもおろかなり。

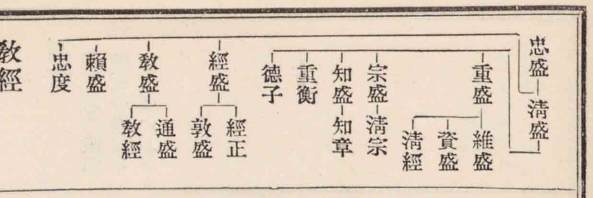
殿をば長生云云
慶滋保胤、天子萬年の詩に、「長生殿裏春秋富、不老門前日月長」。

女院は、後れ奉らじと、御燒石と、御硯の箱とを、左右の御袂にやどし入れ、御身を重くして、つづきて、海に入らせ給ひけるを、渡邊源次郎兵衞番が子に、源五馬允昵といふもの、いそぎ飛び入りて、かづきあげ奉りけるを、昵が郎等、熊手を下し

て、御髪をから巻きて、御船に引き入れ奉る。彌生の末のことなれば、藤重の十二ひとへの御衣を召されたり。翡翠の御髪よりはじめて、皆しほたれおはしますぞ御いたはしき。昵は、もしやの時とて、鎧唐櫃の底にもたりける、唐綾の白小袖、一襲取り出して、女院に參らせたりけるは、夷なれども、なさけあり。昵は、近くは參り寄らず、程を隔て、畏りて、「君は、女院にてわたらせおはするか」と、度度たづね申しければ、御覽じなれぬ夷のありさま、おそろしく思し召しけれども、御ことばを出させ給はず、二度うちうなづかせ給ひけり。

藤重の十二單　藤重は表薄紫裏青。十二單は、女官の裝束の稱。

三　壇の浦　その二



源氏の郎等に、後藤三範綱は、平家の船に飛び入りて、弓をば捨て、打物拔いて、走り回りけるを、越中次郎盛嗣寄せあはせ、組んで重り、上になり、下になり、船中を、五ころび、六ころびしければ、互に、刀を拔く隙もなかりけるところに、盛嗣を助けむとて、惡七兵衞景清、範綱をば刺してけり。前能登守敎經は、元來、心剛に、身健にして、進むことありて、退くことなし。軍敗れぬと見えければ、思ひ切り、死生知らずに振舞ふ。これぞ聞ゆる能登守とて、われ先に、われ先にと爭ひて、かかりけれども、少しも、面も振らず戰ふ。矢頃に廻る者をば、さしつめ、さしつめ射けるに、更に、あだ矢なし。近づくものをば引き寄せ、提げて、海へ投げ入れければ、面を向け難し。

判官　義經。官、檢非違使の尉なりければいふ。

前新中納言知盛卿、これを見て、「よしなき事し給ふものかな。このともがらは、皆、歩兵にこそ侍りぬれ、あながちに、目に立て給ふべきにあらず。自害をもし給へかし」と宣へば、さては、九郎冠者に組めとにこそ。それは、存ずるところなり。いかがはせむと伺ひ回るところに、判官の船と、能登守の船とすりあはせて、通りけり。能登守、然るべしとて、判官の船に乗り移り、兜をば脱ぎ棄て、大童になり、鎧の袖、草摺ちぎり捨て、輕輕と、身をしたためて、いづれ九郎ならむと馳せめぐる。判官、かねて存知して、とかく違って、組まじ、組まじと紛れ行く。さすが、大将軍と覺えて、鎧に、小長刀突いて、武者一人あり。能登守、目をかけて、「軍将義經と見るは、僻目か。故太政入道の弟、門

教盛（一七八九年―一八四五年）

脇中納言教盛の二男に、能登守教經」と名告り、にこと笑ひて、飛びかかる。判官は、組んではかなはじと思ひて、尻足踏んでぞやすらひける。大将軍を組ませじとて、郎等どもが立て隔て、立て隔てしけれども、「除け、やつばら。ものもの」とて、海の中へ踏み入れ、取り入れ、つと寄る。既に組まむとしければ、判官、早業、人にすぐれたり、小長刀を、脇に挾み、さしくくりたる、弓だけ二つばかりなる鄰の船へ、つと飛び移り、長刀取り直して、船端に、にこと笑ひて、立ちたりけり。能登守は、力こそすぐれたりけれども、早業は、判官に及ばねば、力なくして、船に留り、「ああ飛びたり、飛びたり」とほむ。

その後、能登守、今をかぎりと狂ひ回りければ、面を向け難

し。ここに、安藝太郎時家といふものあり。阿波國の住人安藝大領といふものの子なり。三十人の力持ちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく三十人づつ、力あり。時家、二人の郎等にいひけるは、「吾等三人、心を一つにして、組まむには、鬼神といへども負くまじ。能登殿強しといふとも、やは、三人には勝ち給ふべき。三人取ってあはすれば、九十人が力なり。私の力業は、人の證據に立たず。能登守に組んで、ちからをも、人に知らせ、剛の名をも極めむと思ふはいかに」といへば、郎等ども、「仔細に、や及ぶべき」とて、三人一度に、鎹を傾け、打ってかかる。能登守は、源氏の郎等に、名もあり、力もあればこそ、敎經にはかかるらめ、これぞ、軍の最後なると思ひければ、しづしづと相待つ

大臣殿　平宗盛。内大臣なりければいふ。（一八〇七年―一八四五年）

右衞門督殿　宗盛の長子清宗。（一八二九年―一八四五年）

ところに、三人、鼻をならべ、すきまもなく、つと寄る。一人をば、海中へ、たうと蹴入れ、二人をば、左右の脇にかい挾んで、一しめしめて、「いざ、おのれら、敎經が御伴申せ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」とて、海の底へぞ沈みける。

前平中納言敎盛、同新中納言知盛は、一所におはしけるが、伊賀平内左衞門を召されて、「いかに家長、見るべき事は見つ。先帝をはじめ參らせて、一門の人人自害し、海に入りぬ。今までも、かくあれば、つれなき命を惜むに似たり。大臣殿は、いかになり給ひぬるやらむ」と問ひ給ふ。家長、涙を流して、「大臣殿、右衞門督殿二人は、一度に、海に入り給ひたりつるを、敵、熊手にかけ奉りて、二所ながら引き上げ、捕り參らせ候ひぬ」と申

しければ、知盛卿は、「あな心う。など、深くは沈み給はざりけるぞ」と、二度のたまひて、涙を、はらはらと流して、「今は、何をか見聞くべき。家長、日ごろの約束はいかに」と仰せられければ、「今更、君に離れ奉りて、いづちへ行くべきに候はず。御伴なり」と申せば、知盛卿、世にうれしげに思ひて、平中納言教盛卿と、鎧脱ぎ捨てて、西に向ひ、念佛申して、兩人自害せられければ、有國、家長以下、侍八人、同じ枕に、自害して、伏しぬ。「あはれ、この人に、世を讓りたらば、たとひ、運のきはみなりとも、都にて、いかにもなり給ひなまし」と、惜まぬものはなかりけり。

赤旗赤符、海上に充ち滿ちて、紅葉を、風に吹き散したるが如し。海水も、血に變じて、渚渚に寄する波、薄紅にぞ流れける。

蜀江の云云　白氏六帖に、「蜀成都有二濯錦之江一云云」。

頼家公　頼朝の子、二代將軍。北條時政のために、修禪寺に幽殺せらる。（一八四一年―一八六三年）

主を失へる船は、風に隨ひ、潮に引かれて、越路の雁の、行を亂るが如く、膚を離れたる衣は、水に浮き、波にあらそうて、蜀江の、錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓金殿の昔の榮華、船中浪底の今のありさま、思ひならべて、あはれなり。（源平盛衰記）

四　修善寺だより

再啓、昨日は、雨の日ぐらし、無聊に困み、夕景、始めて、傘擎して、川向の小山なる、頼家公の墓を拜し申し候。見るもいたはしき、荒涼たる藪蔭に、空しく、一片の殘石を留めて、慘禍を、生前に極め、恥辱を、末代に曝され候こと、一たび、征夷大將軍の顯榮にも居給ひつる御運を以てして、

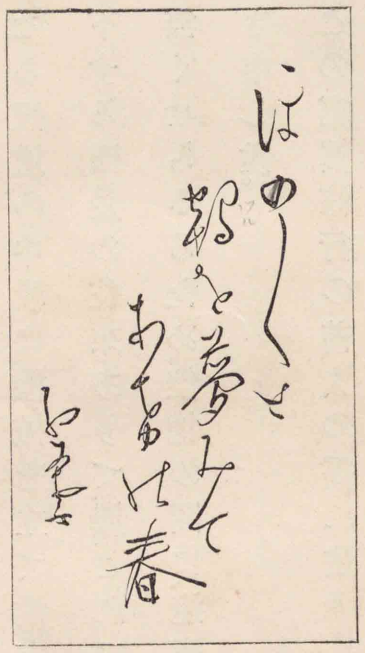
尼將軍　源頼朝の室、平政子。

如何なる、前世の御宿業にかましましけんと、低回、去るに忍びかね候。

墓畔に、尼將軍建立の一切經堂あり。これこそ、公の奥津城にして、現在の五輪塔は、後人の、御墳無きを慨きて、假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば、右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢は、最も、懷古の暗涙を催さしめ候。蒲冠者の墳は、いまだ弔はず、すぐ鄰に候へども、修禪寺にも、參詣致さず候。追って一見の上、申し上ぐべく候。

この日は、一日閉居の餘、入浴、七度に及び、剩へ、連夜の按摩に、全身、綿の如く相成り、疲勞、度に過ぎて、徹夜眠る能はず、黎明、始めて交睫して、覺えず、十一時に至り候處、快晴の天氣、玲瓏、玉の如くなるに、踊躍して、獨鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて、三脚柱の腰部をへしをり、尠からず、當惑致し候へども、應急の手術を施し、やをら、湯の上流の淺瀨に踏み入り、ピントをあはせ候が、ひまどり候程に、水中の赤脚、寒に堪へず、しかも、來浴者頻頻として、目障の邊に、著物を脱ぎはなしなど致し、始終、ピント安を妨害致され、技師の難澀、こ

獨鈷の湯　修善寺の中央を流るる桂川の中に涌出す。



れに過ぎず候ひき。辛うじて、一照致し候へども、印畫の安否、甚だ心元無く存じ候。

それより、去りて、川下なる、廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる阪道の中段に、機械を立て候處、崖下の馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢、これに、道を讓るべく、餘儀無くせらるるため、倥偬の間に、速寫機を拈りて、立ち退き申し候。

この寫眞修行の前、人の需に依りて、少少、麤筆を揮ひ申し候。然るに、僻境の惡箋用ゐるべからずなど、不足を申し候處、亭主才覺して、紙門に貼りのこしの地紙を裁ちて、持ち來り候に、居然たる、檀紙金砂子の好短册を得候こそ、風流、この上なく、感心致し候へ。

二日の雨にて、椎茸出來候へば、味醂醬油の附燒に致し候。今は、春子のすがれにて、肉薄く、氣も、亦、微には候へども、山厨の佳味、侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは、箸を同じうして論ずべきにあらず候。

本日は、食福の日にて、午後には、合宿の衆より、炒豆、草餅を貰ひ、夜に入りて、某氏より、新杵の一折を贈られ候。胃病の人、毎に、餓鬼の如く候。幸に、食談の煩を咎め給ふことなかれ。草草不盡。（尾崎德太郎―紅葉書簡抄）

新杵　横濱の菓子鋪。

五　外人の觀たる富士

マズリエール　佛人。西暦一九〇七年、日本歴史を著す。

一日、マズリエールが新著の日本を繙けば、その中に、富士山の記あり。今、試に、これを譯して、この山の、いかに、外人の眼に映ずるかを示し、同好の士が、臥遊の料に供すべし。

富士なるかな。富士なるかな。この山は、日本人が、自家の本國の象徴とするところにして、詩人は、これを稱して、日本の保護神となし、又、藝術の寶庫となせり。その山たるや、嶂壁を以て、四周に、幾多の湖水を堰き止めたる、山又山の中央に、超然として、圓錐形の頭角を現し、帝王の寶冠を戴きて、端然として、玉座に立たせ給ふに肖たり。ただ、その玉體は、千七百七年に噴出したる、寶永山と稱する惡山の爲に、一分の圓滿を缺蝕せられ給ふぞ遺憾なる。

千七百七年　東山天皇の寶永四年。

この帝王の御衣の裳は、優然として、八方に曳かれ、殊に、南面の方に、長く曳きはへ給へる御裳は、駿河の灣に浸されたり。もし、それ、太平洋に浮びて、沖合遙なる方より眺めんか、山は、さながら、蒼海の中より現出せるが如くならん。嶽皇の神聖を仰ぎ奉るは、實に、この間にあり。

また、その、最も美觀なるは、相模灣の湄なる鎌倉より望む間にあり。その山腰を包める箱根の連山は、更に、南に奔りて、別に、一抹の翠黛をひき、遠近高低相應じて、配合の致を極め、紅暾、將に昇らんとする朝、暮靄、將に暮れんとする夕、仰げば、心も遠く、望めば、思も遙なり。

もし、又、東京より望まんか、閑に罩むる春霞、坐に蔽ふ秋霧

を超脱して、白雪を戴ける、圓錐形の寶冠を、百萬の屋上にかぶらせたる、まことに、崇高無限の情あり。この故に、丹青家は、富士の衆觀を描き、鐵筆家は、又、その諸相を彫りて已まず。雪の富士あり。霞の富士あり。朝の富士あり。夕の富士あり。月の光をあみたる富士、霧の海よりうまれたる富士、蘆原のうへに高き富士、竹村越に見ゆる富士、白帆に、半面を隱せる富士、釣竿の下に臥せる富士、夕日の圓面に入れる富士、鷗飛びかふ波間の富士、帆檣林立せる埠頭の富士、星斗闌干たる秋夜の富士、寫さざる所なく、畫かざる所なし。いかに、日本人が、天然を喜び、自然を愛でて、親愛を、富士に寄せたるかを觀るべし。

また、フルベッキ博士の、始めて來りし時、その船、遠州灘に入り、白雲の上に、この山を認むるや、狂喜、自ら禁ぜず、

青海原、潮の八百重を、わたり來て、
富士の高嶺を、今見つるかも。

と朗吟したるは、餘蘊なく、富士の海上觀を言ひ現したるものといふべし。

英雄の僕は、英雄を知らずとか。これ、朝に、湯沐に侍し、夕に、安定を省し、習ひ、かつ狃れて、いつしか、その人格に、意を留めざるに至るに由りてなり。吾人の、富士に對するも、亦、動もすれば、これに類することあり。偶、西人の、その美を稱ふるを聽けば、今更に、富士の眉目の清新なるを覺ゆる心地す。善いか

な、東湖が、その正氣歌に、國美を數へて、この山に及び「秀爲不二嶽、衆峯難俱儔」と歌ひしこと。マズリエール、人を欺かず。富士は、實に、萬古に亙れる、わが國の象徴なり。（福本誠―日南集）

東湖　幕末の水戸の名士藤田彪の號。（一二四六六年―一二五一五年）

六　自然のあはれ

一、月と露

よろづの事は、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、またひとり「露こそあはれなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折に觸れば、何かはあはれならざらむ。月花は更なり、風のみこそ、人に、心はつくめれ。岩に碎けて、清く流るる水のけしきこそ、時をもわかず

めでたけれ。「沅湘、日夜、東に流れ去る。愁人のためにとどまることしばらくもせず」といへる詩を見しこそあはれなりしか。嵇康も、「山澤に遊びて、魚鳥を見れば、心樂ぶ」といへり。人遠く、水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらじ。（徒然草）

沅湘云云　唐の戴叔倫の詩に「盧橘花開楓葉衰、出門何處望二京師一、沅湘日夜東流去、不下爲二愁人一住少時上」。

嵇康　西晉の人。字は叔夜。竹林七賢の隨一。（八八三年―九二二年）

垂れ籠めて云云　古今集、藤原因香「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」。

二、花と月

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて、月を戀ひ、垂れ籠めて、春のゆくへ知らぬも、なほあはれに、なさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、「障る事ありて、まからで」なども書ける

は、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、この枝、かの枝散りにけり。今は、見所なし」などはいふめる。よろづの事は、始終こそをかしけれ。望月の、くまなきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて、待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる、むら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴白樫などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、こころあらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて、月花をば、さのみ、目にて見るものかは。春は、家を立ち去らでも、月の夜は、閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。（徒然草）

七　百蟲譜

蝶の、花に飛びかひたる、優しきものの限なり。おもしろき音も出さねば、籠にくるしむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこそ、莊周が夢も、このものには託しけめ。

蛙は、古今の序に書かれてより、歌よみのつらに思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風靜りて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛びて、翁の目さましたるなど、このもの、更に謗りがたし。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが、卯月の頃、端居めづら

莊周が夢
莊子に、「昔莊周夢爲二胡蝶一、栩栩然胡蝶也、不レ知レ周也、俄然覺則蘧蘧然周也云云」。

古今の序に
古今集の序に、「花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生ける者、いづれか歌を詠まざりける」。

しき夕、はじめて、ほのかに聞きたる、又は、長月の頃、力なく殘りたる、寂しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚きを

翁の云云　松尾桃青の句に、「古池や蛙とびこむ水の音」。翁は桃青の尊稱。

る里のさまなど、かつは、風雅の道具となれり。藪蚊は、殊にはげしきを、かの七賢の夜ばなしには、いかに、團扇のひまなかりけん。

七賢　晉の嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎等、竹林の遊をなす。

蟬は、ただ、五月晴に聞き初めたるがよきなり。やや日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るここちす。されば、初蝶初蛙などはいはぬに、このものばかり、初蟬といはるるこそ手がらなれ。やがて死ぬ、けしきは、見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたり。

やがて死ぬ　「けしきは見えず蟬の聲」。

日ぐらしは、多きもやかましからず。曉にも鳴けど、猶聞くべきは、暑さの晝の梢を過ぎて、夕の草に、露おく頃ならん。つくつくぼうしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。筑紫の人の、旅に死して、このものになりにたり」と、世の諺にいへり。あはれは、蜀魂の、雲にも劣るべからず。

おなじ寶の名に呼ばれて、玉蟲はやさしく、黃金蟲はいやし。蜉蝣は、はかなき例にひかれ、蓼くふ蟲は、物ずきの謗となれり。

蝸牛は、只、水にあるべきものの、いかで、草葉に遊ぶらん。家持ちたれども、ゆく先先を負ひあるくは、雲水の安きにも似ず。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。ただ、原、吉原を、駕籠に乘りて、富士を眺めつつゆく人にぞ似たる。

促織、鈴蟲、轡蟲は、その音に似たるをもて、名に呼べり。松蟲の、その木にもよらぬに、いかで、かく、名をつけたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも、同じ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一在所に、二人の八兵衛ありて、一人は、後生を願ひ、一人は、殺生を事とす。これ、松蟲の類か。

蟋蟀の、つづりさせとは、人のために、夜寒を敎ふるなり。藻に住む蟲は、われからと、ただ、身の上をのみ歎くらんを、蓑蟲の、ちちよと呼ぶは、いとやさしげなり。されど、父のみ戀ひて、など、母を慕はざるならん。（横井也有―鶉衣）

原、吉原　駿河國駿東郡原、同富士郡吉原。

つづりさせと　古今集、在原棟梁「秋風に綻びぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりすなく」。

われからと　古今集、藤原直子「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば怨みじ」。

八　うへ野山

花　四方赤良

いちめんの、花は碁盤の、上野やま、
黑門まへに、かかるしらくも。

柳　鹿津部眞顏

あらそはぬ、かぜの柳の、絲にこそ、
勘忍ぶくろ、ぬふべかりけれ。

時鳥　つぶり光

ほととぎす、自由自在に、きく里は、
さか屋へ三里、豆腐屋へ二里。

時鳥に、有明の月かきたる繪に。　四方赤良

時鳥、鳴きつるあとに、あきれたる、
後德大寺の、ありあけのかほ。

月　朱樂菅江

あまのはら、月すむ秋を、まふたつに、
ふりわけ見れば、てうど仲麿。

雪　四方赤良

時鳥なきつる云云
千載集、後德大寺實定「時鳥なきつる方をながむれば、ただ有明の月ぞのこれる」。

あまのはら云云
古今集、安倍仲麿「天の原ふりさけ見れば、かすがなる三笠の山にいでし月かも」。

駒とめて云云

新古今集、藤原定家「駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」。

天地の云云
古今集序に、歌の德をあげて、「力をも入れずして、天地を動し」。

つひにゆく云云
古今集、在原業平「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」。

駒とめて、袖うちはらふ、世話もなし、
坊主合羽の、ゆきのゆふぐれ。　宿屋飯盛

歌人に贈る。

歌よみは、下手こそよけれ、天地の、
動き出しては、たまる物かは。　鯛屋貞柳

述懷

つひにゆく、道とはかねて、業平の、
業平のとて、けふもくらしつ。

九　戰爭と文學

一國の文學は、他の藝術とひとしく、その國民の思想、およ

び、感情を代表するものにして、すなはち、國民の靜相的活動なり。しかして、戰爭は、おなじ國民の動相的活動なり。さて、この象を殊にして、根を一にせる二者の關係は、說明しやすきが如くにして、說明しやすからず、簡單なるが如くにして、複雜なり。

文學と戰爭との關係は二樣なり。文學の、主となれる場合と、文學の、客となれる場合となり。換言すれは、文學が、戰亂の因緣となれる場合と、文學が、戰亂の果報となれる場合となり。もとより、文學も、戰亂も、ともに、當代の思想感情の反映なれば、互に、動機を一にし、相因果すべきものなれども、なほ、こまかにわかつ時は、主客因果の差異あり。たとへば、佛國革命

ルソー　有名なる民主主義論者。社會契約論、エミール等の著あり。(一三七二年—一四三八年)

ボルテール　有名なる文學者。アンソアド、ジアンカラー獄等の著あり。(一三五四年—一四三八年)

にさきだちて、ルソー、ボルテール等が唱道せし、社會革新的の學說のごとき、たとひ、その因たるに足らざりしにもせよ、その一緣たりしや、明なり。また、わが國にていへば、かの水戸藩等の各勤王家の述作の如き、いづれも、明治革新の間接緣となりしなり。これらは、文學の、主となれる場合なり。ただし、嚴正にいへば、かくの如きは、畢竟、天下の大勢の然らしめしところ、文學は、わづかに、大勢爆發の一導火たりしに外ならざるなり。一二、文學の力、よく、天下の大勢を動し得べしと思はんは、まことに、白日夢の譫語なり。

戰爭の、文學におよぼす影響は、前者に比すれば、利害、やや複雜なり。そもそも、戰爭は、その因緣影響の上よりいへば、い

かなる場合にも、前後數代に關係すれど、その實際の作用上よりいへば、專ら、當代にのみ關係するものなり。そは、全國の人心をして、奮發激昂せしむるなど、その當代の得喪に聯關するところ、甚だ深ければなり。しかるに、文學の活動する範圍は、かくの如くならず、現世間に關係すると共に、未來幾千年後の世間にも關係すべき特質を具ふ。これ、文學の價値の、現世兼未來に普遍平等なる所以なり。しかして、もとより、現世に聯關するものなるが故に、間接、もしくは直接に、當代の大事件によりて、動さるることなき能はず。ましてや、國家的鬪爭の如き大現象は、必ず、若干の大影響を、文學の主題、および、性質の上におよぼすべき理なり。しからば、その影響は、善

納鑿相容れず　楚辭に、「圓鑿而方枘兮。吾固知二其鉏鋙而難ヲ入」。

か、はた惡か。

この影響も、また、直接と間接との二あり。さて、いかなる場合にも、その直接の影響は、文學の爲には、悅ぶべきものにあらず。そもそも、文學は、もと、一種の遊戲なれど、戰爭は、最も嚴格なる實際事業なり。されば、戰爭は、人心をして、最も、現在に傾かしむるものなれば、利己的、卽ち差別的なり。かの、優美なる遊戲三味は、人心をして、一種の別天地に逍遙せしめんと期するものなれば、最も無私的、卽ち平等的なり。その枘鑿相容れざる性、一朝混ぜられて、一となる。文、もし、武に勝たば、文弱たるべきが如くに、武、もし、文に勝たば、殺伐たらん。よし、しからずとも、文學を擧げて、現世的たらしめんは必然なり。國

家の大鬪爭における激昂は、國民をして、その全生命をも、犧牲に供せしむ。況や、その他をや。啻に、文學美術のみならんや、敎育農商業等、片時も缺くべからざるものすら、或は、時に等閑視せらるることあり。

戰爭の當時は、概して、詩靈かくれ、天馬蟄する時なり。文學の、最も高尙なるもの、卽ち、純乎たる客觀の詩、劇詩小說のたぐひは、しばらく、これが爲に、影をかくさん。ひとり、主觀の詩、卽ち、抒情述懷の作は、或は、實感に動されたる、多感なる詩人が、不思議靈妙なる繡腸よりなり出でて、至誠、鬼神をして哭せしむることなきにしもあらじ。されど、そは、偶然なる結果にして、おそらくは、戰爭の與ふる、必然なる直接影響にはあらざるべし。

更にいはん、戰爭は、普遍平等なるべき文學をして、特殊差別の文學たらしめ、現當二世の功德を沒して、世間一時の好尙に供す。ここにおいてや、この時代に、最も歡迎せらるべき文學は、現世的實錄、もしくは、現世的事件に、緣故ある記錄、これなり。すなはち、文學の形式上よりいへば、所謂寫實的なるもの、最も喜ばれ、質の上よりいへば、勇壯悲哀、もしくは殺伐なるもの、また、精神の上よりいへば、總じて、主觀的、抒情的、就中、愛國の思想感情を吐露せるもの、最も悅ばれん。しかして、その國の過去の光榮の記錄、もしくは、過去の英雄豪傑、忠臣孝子、節婦烈女等の傳說の如きは、同一精神に協ふべきもの

なれば、これら、史に關する抒情歌、敍事詩、小說等、一層の繁昌をなすことあるべし。これ、余の、揣摩の說にあらず、列國の文學史、皆、これを證して、あまりあり。（坪內雄藏―文學その折折）

一〇　爲朝の軍議　その一

新院は、齋院の御所より、北殿へ遷らせ給ふ。左府は、車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に、門二つあり。東の門をば、平馬助忠正承つて、父子五人、竝に、多田藏人大夫賴憲、都合、二百餘騎にて、固めたり。西の門をば、六條判官爲義承つて、父子六人して、固めたり。その勢、百騎ばかりには過ぎざ

新院　崇德上皇。
左府　左大臣藤原賴長。（一七八〇年―一八一六年）
父子五人　忠正と、その子長盛、忠綱、正綱、通正。
爲義　源義親の子。檢非違使尉となり、六條堀川に住みし故に、六條判官といふ。―この時年六十一（一七五六年―一八一六年）
父子六人　爲義と、その子賴賢、賴仲、爲宗、爲成、爲仲。
鎭西八郎爲朝　この時年十八。（一七九九年―一八三〇年）
家弘　平氏。

りけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は、內裏へ參りけり。ここに、鎭西八郎爲朝は、「われは、親にも連るまじ。兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬやうに、只一人、いかにも强からむ方へさし向け給へ。たとひ、千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はむずるなり」とぞ申しける。依つて、西河原表の門をば固めたり。北の春日表の門をば、左衞門大夫家弘承つて、子供具して、固めたり。その勢、百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇、天下に許されし故なり。件の男、器量、人に超え、心、飽くまで剛にして、大力の强弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束をひくこと、世に超えたり。幼少より不敵にして、

兄にも、所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて、都に置きなば悪しかりなむとて、父ふけうして、十三の歳より、鎮西の方へ追ひ下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の國の阿曾平四郎忠景が子、三郎忠國が壻になつて、君よりも給らぬ、九國の總追捕使と號して、筑紫を從へむとしければ、菊池、原田をはじめとして、所所に、城を構へて立て籠れば、その儀ならば、いで落して見せむとて、いまだ、勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年が内に、九國を、皆攻め落して、みづから、總追捕

鎮西　筑紫をいふ。

使に押しなつて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等、都に上り、訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて、宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟悪頻聞、狼藉尤甚、早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

然れども、爲朝、猶參洛せざりければ、おなじき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使になされたり。爲朝、これを聞きて、「親の、科に當り給ふらむこそあさましけれ。その儀ならば、われこそ、いかなる罪科にも行はれむずれ」とて、急ぎ上りければ、國人、共に上洛すべきよし申しけれども、大勢にて、罷り上らむこと、上聞穏便ならずとて、形の如くにつき

香椎宮　筑前國糟屋郡にあり。今官幣大社。

宰府　太宰府の略。筑前國筑紫郡太宰府村に、その遺址あり。

八龍　源氏重代の名甲の一。

従ふ兵ばかり召し具しけり。傅子の、箭前拂の須藤九郎家季、その兄、隙間數の悪七別當、手取の與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦二郎、左中次吉田兵衛、打手の紀八、高間三郎、同じく四郎をはじめとして、二十八騎をぞ具したりける。依って、去年より在京したりしを、父、ふけうをゆるして、今度の御大事に召し具しけるなり。

一一　爲朝の軍議　その二

爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に、色色の絲を以て、獅子の丸を縫ったる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以てをどしたる、大荒目の鎧、同じき獅

吳子、孫子　ともに周末の人。吳子名は起、魏の文侯の臣。孫子名は武、吳王闔閭の臣。

養由　名は基、周末の人、楚の將。

子の金物打ったるを著るままに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて、鈌打ったるに、三十六さしたる、黑羽の矢負ひ、兜をば、郎等に持たせて、歩み出でたる體、樊噲も、かくやと覺えて、ゆゆしかりき。謀は、張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子孫子が難しとするところを得、弓は、養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇をはじめまゐらせて、あらゆる人人、音にきこゆる爲朝見むとて、擧り給ふ。左府、すなはち、「合戰の趣はからひ申せ」と宣ひければ、畏って、「爲朝、久しく、鎭西に、居住仕って、九國の者ども從へ候ふについて、大小の合戰、數を知らず。中にも、折角の合戰、二十餘箇度なり。或は、敵に圍

まれて、強陣を破り、或は、城を攻めて、敵を亡すにも、皆、夜討に如くこと侍らず。然れば、只今、高松殿に押し寄せ、三方に、火を懸け、一方にて支へ候はむに、火を遁れむものは、矢を免るべからず、矢を恐れむ者は、火を遁るべからず。主上の御方、心にくくも候はず。ただし、兄にて候ふ義朝などこそ驅け出でむずらめ。それも、眞中指して、射透し候ひなむ。まして、清盛などがへろへろ矢、何程の事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散して、捨てなむ。行幸、他所へ成らば、御ゆるされを蒙って、御供の者、少少射むずる程ならば、定めて、駕輿丁も、御輿を捨てて、逃げ去り候はむずらむ。その時、爲朝參り向ひ、行幸を、この御所へ成し奉り、君を、御位に卽けまゐらせむこと、掌を反す如く

掌を反す　説苑に、「變所レ欲レ成、易二於反レ掌」。

に候ふべし。主上を迎へまゐらせむこと、爲朝、矢二つ三つ放さむずるばかりにて、いまだ、天の明けざらむ前に、勝負を決せむ條、何の疑か候ふべき」と、憚る所もなく申したりければ、左府、「爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが、主上、上皇の御國あらそひに、源平、數をつくして、兩方に在って、勝負を決せむに、無下に然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるることあり。興福寺の信實、玄實等、芳野、十津河の、指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召し具して、千餘騎にて參るが、今夜は、宇治に著き、富家殿の見參に入り、曉、これへ參るべし。彼等を待ちととのへて、合戰をば致すべし。又、

富家殿　頼長の父忠實。富家殿は、その別業の名。（一七三八年―一八二二年）

明日、院司の公卿、殿上人を催さむに、參らざる者共をば、死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ばば、殘は、などか參らざるべき」と仰せられければ、爲朝、上には、承伏申して、御前を退り立ちて、つぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には、似も似ぬ事なれば、合戰の道をば、武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ、いかがあらむ。義朝は、武略の奥義を究めたる者なれば、定めて、今夜寄せむとぞ仕り候ふらむ。明日までも延べばこそ、芳野法師も、奈良大衆も入るべけれ、ただ今押し寄せて、風上に、火を懸けたらむには、戰ふとも、いかでか、利あらむ。敵、勝に乘る程ならば、たれか一人安穩なるべき。口惜しきことかな」とぞ申しける。（保元物語）

秋風を云云　後拾遺集、能因法師「都をば霞と共にたちしかど秋風ぞふく白川の關」。

紅葉を云云　千載集、源頼政「都にはまだ青葉にてみしかども紅葉ちりしく白川の關」。

雪にもこゆる　橘爲仲集に、「人傳に聞き渡りしを年ふりて今日雪そへぬ白川の關」。

仙臺　陸前國宮城郡、伊達氏の舊治。

一二　奥の細道

日數重るままに、白河の關にかかりて、旅心定りぬ。この關は、昔より名高きところにして、風騷の人、心をとどめずといふことなし。秋風を、耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢、なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。

仙臺に入れるは、あやめ葺く日なり。一日、そのあたりの名所見めぐる。宮城野の萩しげりあひて、秋の景氣おもひやらる。玉田、横野、つつじか岡は、馬醉木さく頃なり。藥師堂、天神の御社など拜みて、その日は暮れぬ。

多賀城の碑
同郡市川村多賀城址にあり。

多賀城の碑は、高さ六尺餘、横三尺ばかり、苔を穿ちて、文字幽なり。四維國界の里數をしるす。此城、神龜元年、歳次甲子、按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年、歳次壬寅、參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也。天平寶字六年十二月一日」とあり。昔より、よみ置きける歌枕、多く語り傳ふと雖も、山崩れ、川流れて、道あらたまり、石は埋れて、土にかくれ、木は老いて、若木にかはれば、時移り、代變じて、その迹たしかならぬことのみなるを、疑もなき千歳の記念、今、眼前に、古人の心を閲す。行脚の一德、存命の悅、羇旅の勞を忘れて、泪おつるばかりなり。

鹽竈の明神
陸前國鹽竈町にあり。

國守再興
元祿二年伊達綱村造營。

和泉三郎
藤原忠衡。秀衡の第三子。（一一八四九年）

それより、野田の玉川、末の松山を尋ね、鹽竈の浦に、入相の鐘をきく。五月雨の空、聊か晴れて、夕月夜幽に、籬が嶋も、程近く、蜑の小舟こぎつれて、さかな分つ聲聲、あはれなり。あくる日の朝、鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階、九仞にかさなり、朝日、朱の玉垣をかがやかしぬ。かかる道のはて、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、わが國の風俗なれと、いとたふとし。神前に、古き寶燈あり。かねの戸びらの面に、「文治三年和泉三郎寄進」とあり。五百年來の俤、今、眼の前に浮びて、そぞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名、今に至りて、慕はずといふ者なし。誠に、人は、よく、道を勤め、義を守るべし、名もまた、これに從ふ。日、

既に、午にちかし。船をかりて、松嶋にわたる。その間二里餘、雄嶋の磯につく。

洞庭 清國湖南省岳州府にある大湖。
浙江 清國浙江省杭州府にあり。

抑、ことふりにたれど、松嶋は、扶桑第一の好風にして、およそ、洞庭西湖をはづかしむ。東南より、海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたたふ。嶋嶋の數を盡して、敧つものは、天を指し、臥すものは、波に匍匐し、あるは、二重にかたより、三重に疊みて、左にわかれ、右につらなる。負ふもあり、抱くもあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉、汐風になびきて、屈曲、おのづから矯めたるが如し。その氣色窅然として、美人の顏を粧ふ。ちはやぶる神代のむかし、大山づみのなせる業にや、造化の天工、いづれの人か、筆をふるひ、詞を盡さん。

雄嶋が磯は、地つづきて、海に出でたる嶋なり。雲居禪師の別室の迹、座禪の石などあり。また、松の木蔭に、世を厭ふ人なるべし、松笠などうち煙りたる、草の庵しづかに住みなせり。

雲居禪師 元和の頃の名僧。
瑞巖寺 松嶋村にあり。禪宗。
眞壁平四郎 法名を法身といふ。

いかなる人とは知られずながら、まづなつかしくて、立ちよる程に、月、海にうつりて、晝のながめ、復あらたまりぬ。江上に歸りて、宿を求むれば、窓をひらき、二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁平四郎、出家して入唐、歸朝の後開山す。その後に、雲居禪師の德化に依りて、七堂、甍改りて、金碧の壯嚴、光を耀し、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。

平泉へと心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人稀に、雉兎蒭蕘の往きかふ道、そことも分かず。遂に、路踏みたがへて、石の巻といふ湊に出づ。「黄金花咲く」と詠みて奉りけん金華山、海上に見渡され、數百の廻船、入江につどひ、人家、地を爭ひて、竈の煙立ち續きたり。思ひかけず、かかる所にも來れるかなと、宿儆らんとすれど、更に、かす人なし。漸く、まどしき小家に、一夜をあかして、明くれば、復、知らぬ道迷ひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、ままの萱原など、よそ目に見て、遙なる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩と云ふ所に一宿して、平泉に到る。その間、廿餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の址は、一里こなたにあり。秀衡が館の墟は、田野になりて、金鷄山のみ、形を遺せり。まづ、高館にのぼれば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて、大河に落ち入る。泰衡等が舊蹟は、衣が關を隔てて、南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつて、この城に籠り、功名、一時の叢となりぬ。「國破れて、山河あり。城春にして、草青みたり」と、笠打ち敷きて、時の移るまで、涙を落しぬ。

夏草や、つはものどもが、夢のあと。

かねて、耳驚したる二堂開帳す。經堂は、三將の像を遺し、光堂は、三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉、風にやぶれ、黄金の柱、霜雪に朽ちて、既に、頽廢空虛の叢

平泉　陸中國西磐井郡。

雉兎蒭蕘　孟子に、「蒭蕘者往焉、雉兎者往焉」。

黄金花さく　萬葉集、大伴家持、「すべらぎの御代榮えむと東なるみちのく山に黄金花さく」。

三代　藤原清衡―基衡―秀衡。

高館　義經の居城。

國破れて云云　唐の杜甫の春望の詩に、「國破山河在、城春草木深」の句あり。

三將　三代に同じ。

三尊　中尊阿彌陀、夾侍觀音、勢至。

七寶　普通には、金、銀、琉璃、玻璃、車渠、瑪瑙、眞珠。

となるべきを、四面、新に圍み、甍を覆ひて、風雨を凌ぎ、暫時、千歳の記念とはなれり。

五月雨の、降りのこしてや、光堂。

（松尾桃青―奥の細道）

一三　木枯

○　池西言水

木枯の、はてはありけり、なみの音。

○　久村曉臺

あかつきや、鯨の吼ゆる、しもの海。

○　高桑闌更

枯蘆の、日に日に折れて、流れけり。

●　谷口蕪村

易水に、根ぶかながるる、寒さかな。

●　向井去來

應應と、いへどたたくや、雪のかど。

●　松尾桃青

いざ行かん、雪見に轉ぶ、ところまで。

一四　日野山の閑居

ここに、六十の露消えがたに及びて、さらに、末葉のやどりを結べることとあり。いはば、旅人の、一夜の宿をつくり、老いた

いはば旅人の云云　慶滋保胤の池亭記に、「亦猶下行人之造二旅宿一、老翼之成中獨爾上矣。其住幾時乎」。

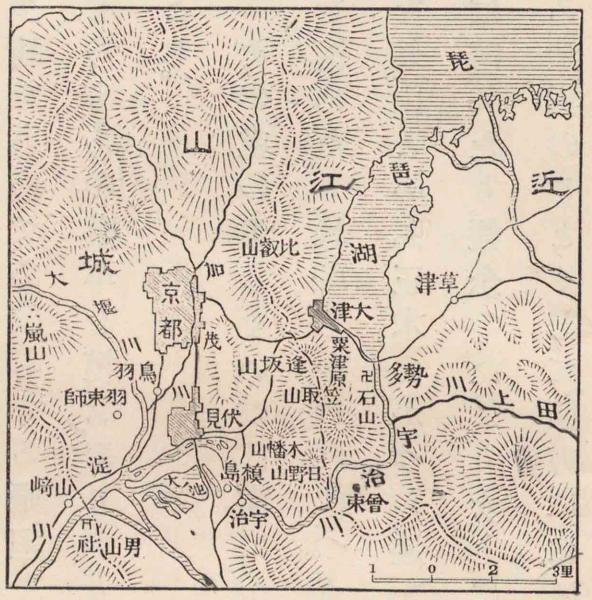
る蠶の、繭をいとなむが如し。これを、中頃のすみかになずらふれば、また、百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は、年年にかたぶき、住家は、折折にせまし。その家のさま、世の常ならず。廣さは、わづかに方丈、高さは七尺ばかりなり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、つぎ目毎に、かけがねをかけたり。もし、心に適はぬことあらば、やすく、外に移さむがためなり。その、改めつくる時、いくばくの煩かある。積むところ、わづかに二輛なり。車の力をむくゆる外は、さらに、他の用途いらず。

いま、日野山の奥に、迹をかくして後、南に、假の日がくしをさし出して、竹のすのこを敷き、その西に、閼伽棚を作り、うち

日野山　山城國宇治郡。

普賢　菩薩の名。釋迦佛の右の脇士。

往生要集　六卷。横川の源信僧正の著。



には、西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて、眉間のひかりとす。かの帳の扉に、普賢、ならびに、不動の像をかけたり。北の障子の上に、ちひさき棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く、すなはち、和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに、箏、琵琶、おのおの一張をたつ。いはゆる折箏、つぎ琵琶、これなり。東にそへて、蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて、夜の牀と

す。ひがしの垣に、窓をあけて、ここに、文机をいだせり。枕のかたに、すびつあり。これを、柴折りくぶるよすがとす。庵の北に、少地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて、園とす。すなはち、もろもろの薬草を植ゑたり。かりの庵のありさま、かくのごとし。

その處のさまをいはば、南に、かけひあり。岩をたたみて、水を溜めたり。林、軒ちかければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら、迹をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は、藤浪を見る、紫雲のごとくして、西方ににほふ。夏は、子規を聞く。かたらふごとに、死出の山路をちぎる。秋は、蜩の聲、耳に滿てり。空蟬

の世をかなしぶと聞ゆ。冬は、雪をあはれぶ。つもり、消ゆるさま、罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また、恥づべき友もなし。ことさらに、無言をせざれども、ひとり居れば、口業をさめつべし。かならず、禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。もし、迹のしら浪に、身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし、桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もし、あまりの興ある時は、しばしば、松のひびきに、秋風の樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝は、これ拙けれど、人の耳をよろこ

迹の白波　拾遺集、沙彌滿誓「世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆく船のあとのしら波」。

潯陽の江　白樂天の琵琶行に、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟云云」。

源都督　桂大納言源經。

信、琵琶の名手。（一六七六年―一七五七年）

秋風、流泉　ともに琵琶の曲名。

木幡山、伏見里、鳥羽　山城國紀伊郡。

羽束師　同國乙訓郡。

勝地は云云　白氏文集に、「跨地本來無二定主一、大都山屬二愛山人一」。

ばしめむとにもあらず、ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづからを、心をやしなふばかりなり。

また、麓に、一つの柴の庵あり。ずなはち、この山守が居るところなり。かしこに、小童あり。時時來りて、あひ訪ふ。もしつれづれなる時は、これを友として、遊びありく。かれは十六歳、われは六十、その齢、ことの外なれど、心をなぐさむることは、これおなじ。あるひは、つばなをぬき、岩なしをとる。又、ぬかごをもり、芹をつむ。あるひは、すそわの田居におりて、落穂を拾ひて、ほぐみを作る。もし、日うららかなれば、嶺によぢのぼりて、はるかに、故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は、主なければ、心をなぐさむるに、さはりなし。あゆみ、

炭山、笠取　山城國宇治郡。

岩間　近江國滋賀郡、正法寺の觀音。

石山　同國同郡石山寺の觀音。

猿丸大夫の墓　同國栗太郡田上村大字曾束にあり。

山鳥のほろほろと　玉葉集、行基、「山鳥のほろほろとなく聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」。

わづらひなく、志、遠くいたる時は、これより、嶺つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて、あるひは、岩間にまうで、あるひは、石山を拜む。もしは、又、粟津の原を分けて、蟬丸翁が迹をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫の墓をたづね、かへるさには、をりにつけつつ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは、佛にたてまつり、かつは、家苞にす。もし、夜しづかなれば、窓の月に、古人をしのび、猿の聲に、袖をうるほす。草むらの螢は、遠く、眞木の嶋のかがり火にまがひ、曉の雨は、おのづから、木の葉吹く嵐に似たり。山鳥の、ほろほろと鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峯のかせぎの、近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるひは、埋火をかきおこし

て、老のねざめの友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれぶにつけても、山中の景色、折につけて、盡くることなし。いはむや、深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

峯のかせぎの　西行の歌に、「山ふかみなるるかせぎのけぢかさに世に遠ざかる程ぞ知らるる」。

おそろしき山　西行の歌に、「山深みけぢかき鳥の聲はせで物おそろしきふくろふの聲」。

大かた、このところに住み初めし時は、あからさまと思ひしかど、今、すでに、五とせを經たり。假の庵も、ややふる屋となりて、軒には、朽葉ふかく、土居に、苔蒸せり。おのづから、事のたよりに、都を聞けば、この山にこもり居て後、やむごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。まして、數ならぬたぐひ、つくして、これを知るべからず。度度の炎上に亡びたる家、又、いくばくぞ。ただ、假の庵のみ、のどけくして、恐なし。（方丈記）

一五　死と永生

死は、生きとし生けるものの免るべからざる運命なり。それ、唯、免るべからざる運命なり。故に、また、避くべからざる問題なり。されど、世に、生を惜む人はあれども、死を惜む人は少く、生について慮る人はあれども、死について考ふる人は稀なり。訝しからずや。

如何にして生くべきか、これ、人生の、大いなる疑問なり。然れど、如何にして死すべきかは、更に大いなる疑問にあらざるべきか。われらは、歴史を讀みて、大いなる宗教の起るを見たり。されど、宗教とは、生きんが爲の教に非ずして、死せんが

四苦
生老病死。

ための悟なり。釋迦は、人生の四苦に感じて、解脱の途を說きぬ。耶蘇は、同胞の宿罪を贖うて、永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして、何の意義かある。最も賢き人の說ける哲學の旨趣も、亦、これに外ならざるなり。天地人生の理法を明にするは、人をして、安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは、つまり、死を安からしむるの謂にあらずや。道德は、現世の爲にのみ存するものにあらず。名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言ふは、これ、卽ち、死後の世界を言ふなり。あはれ、その生を見て、その死を見ざるものは、人生の根本を遺れたりといふべし。死は、すべての物の終にして、又、すべての物の始なればなり。されば、人人、死を考へよ。死を考ふるは、卽ち、人生の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、卽ち、如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは、死滅を考ふるにあらずして、永生を考ふるなり。死は、人生の究竟なるが故に、永生は、人生の目的なり。かの、生死の優劣を爭ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。われらは、生を知り、いまだ、死を知らず。如何ぞ、その優劣を知らん。人生の價値は絶對なり、他に比すべきものなし。厭世といひ、樂天といふ、われらの、何の意たるを知らず。われらは、唯、人生の實在せるを知るのみ。

されば、われらは生きざるべからず、永遠に生きざるべからず。死は、萬物の運命なり。されど、われらは、死を超絶して、そ

の永生を續けざるべからず。如何にせば、死して生くるを得んか、人生究竟の問題、ここに集る。

世に、佛に願ひて、涅槃の寂寞を求むるものあり。されど、形骸を離れて、魂魄なきを、如何にすべき。又、その墳墓を壯大にし、金を鏤め、石に刻して、名の、後世に傳らんことを求むるものあり。されど、時は、すべての物の破壞者なり。風雨幾歳、時移り、人渝り、桑滄、幾度か變轉して、墓標、獨全きを得べけんや。かくの如きは、永生の道に非ざるなり。

まことの永生は、名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存するところ、今なほ、孔子あらざるはなく、佛寺の建つところ、到るところに、釋迦あり。耶蘇は、十字架にかかりきと雖も、今なほ、基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激するものの胸には、楠公その人の生命あり。蒸氣機關の動くところに、ワットの血液あり。電氣の線のかかるところは、卽ち、フランクリンが、永生の地にあらずや。まことの永生は、時と共に、深きを加へ、人と共に、廣きを加ふ。されば、一人の精神は、千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩蕩汨汨として、つひに、世界を動さずんば已まざるべし。十九世紀の文明は、かくのごとき、幾多永生の結果に外ならざるなり。

涅槃　無爲、圓寂、寂滅、不生不滅など譯す。梵語。

ワット　英人、蒸氣機關を大成せり。(一三九六年―一四七三年)

わが少年諸子よ、諸子は、曾て、死を考へしことありや。その、年の弱きを以て、早しとすること勿れ。死を思はずして生き

たるは、空しく生くるなり。その死をして、憾なからしめんと欲せずして、ひとり、その生の完からんことを望むは、これ、的なくして、道を歩むなり。死を思ふは、卽ち、永生を思ふなり。而して、最も好く、この問題を解釋したるものは、哲人傑士なり。

（高山林次郎―樗牛全集）

十四日　元祿十五年十二月。

都文公　土屋主税。

一六　義士討入の模樣を報ず

歳暮の御壽として、例年の如く、遠來の處、酒料一封、鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程、幾久しく受納致し候。御序に、御家内はじめ、御社中へも、宜しく御傳言下さるべく候。然れば、去る十四日夜、本所都文公忘年の一興、御催こ

嵐雪　姓は服部、通稱彦兵衛。蕉門十哲の一。（一三一一四年―一三六七年）

杉風　杉山元雅といふ。芭蕉の門人。（一三〇七年―一三九二年）

堀部彌兵衛　名は金丸、義士の一人。（一二八七年―一三六三年）

大高源吾　名は忠雄、義士の一人。（一三三二年―一三六三年）

吉良上野介　名は義央。（一二三六二年）

れあり、嵐雪、杉風、われらも出席にて、折から、雪面白く降り出し、庭中の松杉は、雪を戴き、雲間の月は、晴間を照し、風興捨て難くして、夜、ただ更け行くまま、最早、丑三つの頃と成りゆき、犬だに吠えず、打ち靜り、文臺料紙も押し片寄せ、四五人集りて、蒲團を被り、夢のうき世といふ間もあらず、けはしく、門を叩く者兩人、「我等は淺野家の浪人、堀部彌兵衛、大高源吾にて候。今夕、御鄰家、吉良上野介屋敷へ押し寄せ、亡君、年來の遺恨

板本其角肖像

を果さんとて、大石内蔵介を始め、四十七人門前に相イみ、只今、吉良殿を討ち果し申すべく候。近鄰の御よしみ、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代の御不覺と存じ奉り候。門戸を、嚴しく御防ぎ、火の元御用心下され候はば、忝く存じ奉り候」と、いひも果さず立ち出づるその勢、神妙なること、いふべくもあらず。其角、幸に、爰にあり、生涯の名殘を見んとて、門前に走り出づれば、各、吉良家へ忍び入り候程に、

わが雪と、思へばかろし、笠の上。

と、高高と、一聲よばはり、さて、門を閉ぢて、内を守り、塀ごしに、提燈を立てともし、始終を窺ふに、そのあはれさ、骨

其角　姓は榎本、寶晋齋と號す。蕉門十哲の第一なり。(一二三二一年—一二三六七年)

身にしみ入り、女の叫、童子の泣く聲、風、颯颯と吹き誘ふ。

曉天に至り候へば、本懷、已に達したりとて、大石主税、大高源吾來りて、穩便に、謝儀を述べたること、武士の譽といふべきにて候。

日の恩や、たちまち碎く、厚氷。

と、申し捨てたる源吾が精神、今に忘れ難く候。貴公、年來の入魂ゆゑ、具に認め進じ申し候。早春までに、かれこれ御さし繰り、御出府も候はば、かの落著も承り屆け、餘儀なく、伏劍に及び申し候はば、竊に、追善を相營み申すべく候。まづは、餘日もこれなく、書餘、貴面の時を期し候。恐恐謹言。

大石主税　名は良金、良雄の子、義士の一人。(一二三四八年—一二三六三年)

十二月二十日　　其角

文璘様

月雪の、中や命の、捨てどころ。

一七　福澤先生を悼む　その一

三田の高臺に長嘯して、天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて、泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して、平民の氣焔を揚げたる當代の巨人、福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。

先生は、一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふところ、極めて大なり。曩に、先生、中風の症に惱み、一時、世人を痛憂せしめしかども、その後、輕快に赴き、漸く、健康に復するを傳ふ。

文璘　姓は梅津、通稱半左衛門、佐竹の藩士。

聞く者、皆、愁眉を開きて、これを祝せざるはなし。吾人以爲らく、先生、齡六旬を超えて、一旦、大患に罹る。その快談健筆、以て、社會を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべしと。然れども、この大平民の、社會に存するは、後進の恃んで、心を強くする所なり。卽ち、その、優游自適、一日を永くし、以て、吾人の志に酬いんを願ふこと、甚だ切なりき。然るに、天愁に、この老を遺さず。遂に、本月三日、午後十時を以て、白玉樓に徵し去りぬ。嗚呼、先生の音容、また接すべからず。豈、哀惜歎嗟に勝へんや。

先生の嚴父は、中津藩士にして、子女五人あり。先生は、その季子なり。天保五年十二月二日、大阪の中津藩邸にうまる。三歲にして、父を喪ひ、母子、ともに、中津に歸る。幼時の教育は、尋

天愁に云云　詩經に、「天愁不レ遺二一老一」。

本月　明治三十四年二月。

白玉樓に云云　李長吉の故事によりて、文人の死をいふ。

中津藩　豐前國、藩主は奥平氏。

常の鄕學に、漢書を誦習せるに過ぎず。然れども、その思辨の力は、讀書の力に越えて、早く、儕輩を凌駕したりといふ。

安政元年二月、先生二十一歳、これより先、米使來航し、海内騷然たりしかば、泰西兵術の講習を必要とするに至り、先生、また、砲術研究の志を懷きて、長崎に赴けり。これ、蘭書を讀む機緣なり。明年、大阪に來りて、緒方洪庵先生の塾に入る。これ、先生、生涯の一轉機なり。蓋し、そのはじめ、蘭書そのものに、意なく、ただ、砲術を解する媒とするにありしが、その學、漸く進むに至りて、純乎たる蘭學研修者となれるなり。中ごろ、病のために、一旦、中津に歸りしが、幾時ならずして、再び、緒方塾にかへり、學、益すすみ、塾頭に擧げらる。安政五年、藩の徵に遭ひ、

緒方洪庵　蘭醫、名は章、洪庵はその號。備中足守藩士、後、幕府の侍醫となる。（一二四七〇年―一二五二三年）

江戸藩邸の蘭學教授となる。當時、米人との交際よりして、英語の用、益多かりき。先生の烱眼、早く、轉學の必要を覺り、同學諸氏の說に反し、刻苦して、英書を研修す。

安政六年十二月、幕府、使臣を、米國に派す。先生、その乘艦咸臨丸の艦長木村攝津守に乞ひ、從僕となりて、米國に入り、その文物を實見し、明年五月を以て歸朝す。これ、先生、生涯の一大轉機にして、後來の事業、この觀光の時に得たるもの多し。文久元年十二月、幕府、使節を遣して、歐洲諸國を歷訪せしむ。先生、飜譯方を以て隨行し、英、佛、獨、蘭、葡、露の諸都を觀て歸り、見聞、益廣し。わが社會の暗黑の中に、世界的光明を透したる、西洋事情の一書は、實に、この行の產物なり。慶應三年、軍艦購

木村攝津守　名は毅、芥舟と號す。（一二四九〇年―一二五六一年）

入の件を以て、再び、米國に赴く。先生の意見は、これらの旅行、毎に轉進し、開國の必要を確信し、幕府舊來の階級制と、勤王に伴ふ鎖國論とは、共に、先生の信仰と背馳して、到底相容ることと能はざりき。且、先生は、飜譯官なりしを以て、内外交渉の機事、皆、その掌るところの文書により、これを知ることを得て、幕府の敗亡、國勢の變轉、早くも、先生の眼底に映ぜり。而して、先生は、政權の推移を洞觀せしのみならず、社會事物の變化を豫知せり。先生が、その雙劒を鬻ぎて、帶刀の風を棄てたりしは、維新の際、士人、長刀を挿みて、殺氣、天下に充てる間にありき。

既にして、維新の業成り、政府、大いに、人材を登用して、洋學通明の士、多く徵用せられ、先生、亦、その召命に遭へり。然れども、固辭して就かず。その得るところを以て、社會を啓發せんと欲し、ここに、自ら、天下開發の大任を負ひ、首として、慶應義塾を設けて、後進を教育し、又、著述飜譯を以て、世人を開誘せり。爾來三十四年、藩邸に、塾を立てしより四十年、通じて、學生一萬餘を養へり。その人人、社會各般の階級に出身して、一般の進歩を助く。先生、又、明治十五年を以て、時事新報を開刊し、政黨旺盛、政爭劇甚の間に、別に、社會教育を主義として、一般の知識を開き、又、爭議を判ずるに從へり。

一八　福澤先生を悼む　その二

先生は教育家なり。時代思想の鼓吹者なり。幕府の飜譯方となり、三回、歐米に航せし外、何の經歷あらず。その後半の生涯は、三田の高臺に逸居して、三十餘年を經過せしのみ。波瀾なく、變化なし。然れども、その言語文章を以て、一世を鼓動し、社會を陶冶したる、偉大なる勢力は、ひとり、當世に、匹なきのみならず、古今を通じて、有數なりと評せざるべからず。蓋し、嘉永安政以後、日本が、海外の潮流の中に漂ひ、舊新の思想相鬪ふに際し、先生は、新思想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて、一大勝利を博し、確に、先登の月桂冠を戴けるものなり。

先生の學、專攻なし。故に、一科の長所なく、又、獨創の發明あらず。然れども、思想博大、常識明敏、進歩の見解を、一切の事物に應用して、これを、社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且、その識見は、常に、社會に先んぜり。先生、幼時、儒教の薫陶を受け、その、長崎に赴くや、砲術を修めんと欲し、端なく、蘭書を誦習せり。この際、既に、砲術の、以て、志を成すに足らざるを覺れり。その、江戸に來り、横濱に遊びて、英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち、蘭學を棄てて、英語を學べり。その、海外に遊んで歸るや、幕府、衰滅の免るべからざるを看取し、再び、米國に入るや、兵器を購ふかはりに、書籍を買うて歸り、王政復古の際、士、皆、進仕を榮とするにあたり、巷間に俯して、後進を誘掖し、戰餘の殺氣、いまだ收らざるに、雙刀を脱して、市民

と稱せり。漢儒が、門人を、食客と同視する時代に、授業料を收むる學校組織を立て、政爭喧擾の間に、社會的薫陶に、力を致せり。これ、皆、時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらずば能はざるなり。

先生は、百代を洞觀し、宇宙を解釋する哲學者にあらず。天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず。一代の著述文章は、崇高、宏大、深邃、幽玄の思想界に觸るるにあらずして、每時、眼前の程度より、一等を高めんとするにあり。而して、見解分明、信仰確實、平易大膽なる文を以て、これを宣傳す。その多數を動して、偉大なる效果を收め、優に、社會改造の目的を達せしは、これがためなり。先生の筆述、前後五十部、百五册、收めて、その全集にあり。この他、時事新報に載する者をあはせば、更に多からん。佛人テーヌ、曾て、英國文界の偉人ジョンソンの全集を研究して、謂っていはく、「十九世紀において、新に學ぶべき奇思妙想を發見せずと雖も、その十八世紀の必要に應じて、社會を裨益せしもの多し」と。ジョンソンの勢力が、當時に盛なりし所以、その文書が、一世に、功ありし所以、實にこに在り。後の讀者、その、奇思妙想を發見せざるを以て、その功を小とするを得ず。先生の、文界における位置、蓋し、これに近し。

先生の勢力を以て、單に、その文章識力に歸するは、能く、先生を知る者に非ず。先生は、確信實行を、大膽明快に、筆に載す。

テーヌ　佛の有名なる批評家兼歷史家。（一四八八年—一五五三年）

ジョンソン　（一三六九年—一四四三年）

これ、世を動す所以に非ずや。その、獨立自尊を說くや、口舌文章においてするのみならず、これを、その躬行においてし、その、歐米の文明を鼓吹するや、これを、事物に應用し、その、自由平等を宣傳するや、階級隸屬の生活を破るに汲汲とし、その、官尊民卑の弊を論ずるや、自身、軒冕を、泥塗にする概あり。その、家庭の尊貴を說示するや、先生、まづ、その實例を示さんと努めたり。これ、豈、確信なき者の企て得る所ならんや。

先生を以て、拜金宗の大和尙となし、節義を輕んずる者と爲すは、尤も、先生と、その時代とを曉らざる者なり。蓋し、先生が、歐米の文物を輸入せんとするや、その反面において、鎖國の舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主獨立の主義を

一休の云云
一休の歌に、「釋迦といふいたづらもの」が世に出でて多くの人を迷はするかな。一休名は宗純。高僧。紫野大德寺に住す。(二〇五四年―二一四一年)

宣べんとせば、その反面において、隸屬服從の慣習を打破せざるべからず。平民自活の生業を敎へんとせば、武士世祿の依賴心を棄てしめざるべからず。この過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して、以て、一世を警醒せしもの、卽ち、有名なる楠公論にあらずや。これ、楠公

福澤諭吉肖像

その人を擊つにあらずして、武士の舊想を擊ちたるもの、恰も、一休の、俗僧を打破せんが爲に、釋迦を罵りたる意に髣髴たり。その、金錢を貴ぶの說法は、「武士は食はねど高楊枝」の氣

習を擊破したるものに過ぎず。先生、これがためには、世の怒嘲を冒して戰へり。吾人、却って、先生の勇悍を稱せざる能はず。蓋し、三田の末流に、拜金の臭味あるは、荀卿の說によりて、李斯の徒を出ししに類す。吾人は、先生を以て、この宗派の大和尙と認むる能はざるなり。

荀卿　字は況、周代の趙の人。荀子二十卷を著す。

李斯　楚人。嘗て荀卿に學び、後、秦の丞相となり、挾書の律をしき、儒を坑にせり。（一四五三年）

先生は、儒敎を痛擊し、自活生業を稱道せしが、先生の行は、却って、儒敎の旨に協へり。これ、一見奇なるが如くなれども、決して、奇ならざるなり。先生は、形而上の考案に、多くの思を凝らさず、專ら、實踐躬行を貴べり。これ、「生を知らずして、焉ぞ、死を知らん」との旨に合するにあらずや。先生の、歐米の文物を輸入する、專ら、制度、商業、工藝、科學の實物的傾向を有し、哲

生を知らず云云　論語に、「子曰、未レ知レ生、焉能知レ死」。

理宗敎の研究工夫を要せず。これ、性と天道とを語らざる者に類するにあらずや。その一方に、武士的生活を攻擊するに拘らず、去就を嚴明にして、處士、自ら高うせる迹は、儒敎の、進退節義を言ふ者に類す。その自尊といふ敎訓を以て、天爵を全くせんとするは、孟軻の、「人人、己に貴きものあり」といふに合し、その軒冕を泥塗にして、王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晉楚の富と爵とに對するに、德と齒とを以てしたるに似たり。先生は、知識を、歐米に博採せしが、その行實は、幼時の儒學に涵養せられたるものにて、唯、俗儒の範圍を脫したるにとどまる。これを聞く、先生の嚴父百助君、儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へりと。堀川の實踐學派、先生の心を

性と天道と云云　論語に、「子貢曰、夫子之言レ性與二天道一不レ可二得而聞一也」。

人人己に云云　孟子に、「人人有レ貴二於己一者上弗レ思耳」。

晉楚の富云云　孟子に、「晉楚之富不レ可レ及也、彼以二其爵一、我以二其爵一、吾仁、彼以二其富一、我以二吾義一」。

伊藤東涯　名は長胤、仁齋の子。（一二三三〇年―一二三九六年）

春秋左氏傳　三十卷。孔子の春秋を、周の左丘明の傳したるもの。

養ひしものか。而して、先生、少時、尤も、春秋左氏傳を愛讀せりといへば、節義に嚴なる所、由來なしと言ふべからず。

先生、晩年著す所、頗る、壯年の思想に異り、福翁百話中、往往、形而上の問題に涉るものあり。然れども、科學的研究の結果にあらず。先生は、結局、常識の人なり、實踐の人なり。博大なる思想家にして、精深なる考究家にあらず。大膽なる論辨家にして、懷疑の批評家にあらず。唯、その四十年間、一貫の行逕を辿りて、世の風濤に蕩搖せられず、誠實に、社會を薫陶し、諄諄として倦まず、言行一致、平易の言を立てて、人人行ふを得る道を宣べ、自ら善くし、兼ねて、人を善くせる、その大功、誰か、先生に比すべき者あらん。眞に、常識の巨人、平民の典型なり。獨

仁者云云　論語に、「知者樂水、仁者樂山」。肱を曲げて云云

立自尊の四字は、先生の躬行によつて、社會に現示せられたり。先生の書は、以て、先生を評するに足らずして、唯、その行實を研究して、始めて、能く、その教育を解得すべし。今や、この巨人を失へり。明治社會の損失、これより大いなるはなし。吾人、公においては、平民の典型を奪はれたるを惜み、私においては、敬慕する巨人を失へるを悲む。（嶋田三郎―福澤先生哀悼錄）

一九　歡樂鄕

玆に、一つの世界あり。名づけて、歡樂鄕といふ。哀傷鄕の鄰國にて、衰山に背き、盛山に向へり。ここの山水、世に勝れて、好風好景、比なく、かの、「仁者は、山を樂む」といへる、肱を曲げて、枕

論語に、「飯二疏食一、飲レ水、曲レ肱而枕レ之、樂亦在二其中一」。

風は條を云云

王充の論衡に、「太平之世、五日一雨、風不レ鳴レ枝、雨不レ破レ塊」。

耕す者云云

史記に、「虞芮之人、有レ獄不レ能レ決、乃如レ周、入レ界、耕者皆讓レ畔、民族皆讓レ長」。

として樂む人も、ここにあり。

されば、國王の樂は、賢を用ゐ、佞を遠ざけ、酒を嗜まず、仁に居ること、忘れたるが如く、民を視ること、子の如く、諫を用ゐること、大海の、百川を容るるが如く、恩を施すこと、甘雨の、萬物を育つるが如く、只、仁政を布くことを、身の樂とし給へば、國治りて、民安く、風は、條を鳴さず、雨は、塊を壞らず。五穀豐稔、穂に、穂をかさねて、酷吏なく、賊民なく、耕すものは、畝を讓り、道ゆく者は、道を讓り、人の親としては、慈深く、人の子としては、孝をつくし、兄弟は莫逆にて、妻子は和合し、親族は睦しく、朋友は、信あり、市賈は貳價せず、購ふものも、亦直ぎらず。風俗、すべて、質朴にして、少きは、老いたるを尊び、富めるは、貧しき

莫逆

莊子に、「四人相視而笑、莫レ逆二於心一、遂相與爲レ友」。

麒麟、鳳凰、連理木、靈芝

いづれも靈物にて、聖代の瑞と稱す。

を惠み、智あるは、不能をあはれみ、健なるは、病むものを介抱し、義に依りては、貨を惜まず、身を殺すとも、仁をなさんと心がけ、おのおの、陰德を積むことを樂とする故に、遠きも、近きも、風を望みて、鄰國は臣附し、蠻貊は來貢す。獸に、麒麟あり、鳥に、鳳凰あり、木に、連理あり、草に、靈芝あり。甲冑は、兵庫に積めども、軍せしことなく、獄舍は、纔に、形をとどめて、罪人たえて、一人もなし。

瀧澤馬琴肖像

これを、内聖外王の樂といふなるべし。

されば、又、大臣の、政を執るたのしみは、理亂の道を、よく知

向へる膳に云云　史記に、周公のことをいひて、「一沐三握レ髮、一飯三吐レ哺、起以待レ士」。

修羅道　この趣のものは、鬪戰を好むと、佛經に說けり。

りて、傲り慢る心なく、向へる膳に、箸を擲げて、いそがはしく、士にくだり、結びかけたる髮を握りて、丁寧に、賢を迎へ、四時の氣候をたがへずして、農業を勵し、蠶飼をすすめ、只、その君を、堯舜にいたすを以て樂とす。これより下の三司百官、職を守りて、私なく、皆、その位に安んじて、業を樂まざるものなければ、貴き賤しき、おしなべて、大晦日の修羅道なく、年內より、顏色和ぎ、借りたる物は、時をたがへず、此方より持參して、人に返すを樂とすれば、驟雨の番傘、宵闇の提灯を、「貸し下され」にするものなく、錢を散して、錢を積まざるを樂とし、足らざるものは、油斷なくかせぎて、人を倒さぬを樂とす。

主は、下部の能不能を擇みて、それぞれに憐み養ふを樂と

斷金の交　易傳に、「二人同レ心、其利斷レ金」。

して、給銀のやすきを樂とせず。親は、子を敎へ導き、善人にしたてあぐるを樂として、美服を著せ、物詣につれて出づるを樂とせず。子は、親同胞に、孝悌を盡して、親同胞に歡ばるるを樂として、或は、友を集め、或は、夜遊に出づるを樂とせず。朋輩は、隔なく、斷金の交して、諫め、諫めらるるを樂とする故に、親類にもますこと多かり。

神主は、初穗の多きを樂とせず、只、氏子の爲に、丹誠を抽んでて、その福を祈るを樂とす。ここをもて、初穗多かり。和尙は、又、布施の多きを樂とせず、檀那の爲に讀經するを樂とする故に、おのづから、布施多かり。醫師は、病家の貧福と、藥禮の輕重とをえらまず、方をえらみ、藥を擇み、病を癒すを樂とする

五節供　正月元日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日。

五常　仁義禮智信。

成經　藤原成親の子。（一八一六年—一八六二年）

故に、五節供に、藥禮多かり。およそ、文武の師たるもの、二季の謝儀を見るを樂とせず、よく教育して、道を傳へ、業を授くるを樂とする故に、名實、四海に溢れて、尊ばざるものなく、弟子は、その藝に遊びて、才に誇るを樂とせず、只、その言行を慎み、師を敬ひ、他を誹らざるを樂とす。その樂む所、おのおの同じからずと雖も、五常の道に違ふものなければ、樂喜、餘あれども、憂なし。（瀧澤解—夢想兵衛蝴蝶物語）

二〇　丹波少將

治承三年正月下旬に、丹波の少將成經、平康頼入道二人の人人は、肥前の國鹿瀬の莊を立ちて、都へとは急がれけれど

康頼　平氏。官檢非違使に至る。平判官と稱す。

鹿瀬　肥前國佐賀郡。

父大納言　藤原成親。治承元年八月十九日殺さる。（一七九八年—一八三七年）

有木　備中國賀陽郡庭瀬村。

安元三年　この年八月、治承と改元。

も、餘寒も、いまだ烈しく、海上も、いたく荒れければ、浦づたひ、嶋づたひして、二月十日頃にぞ、備前の兒嶋に著き給ふ。

それより、少將は、父大納言殿のわたりありし、有木の別所とかやに尋ね入りて見給へば、竹の柱、舊りたる障子などに書き置き給ひつる、筆のすさびを見給ひて、「あはれ、人のかたみには、手蹟に過ぎたる物ぞなき。書き置き給はずば、いかで、これを見るべき」とて、康頼入道と二人、讀みては泣き、泣きては讀む。「安元三年七月二十日出家、同じき二十六日信俊下向」とも書かれたり。さてこそ、源左衛門尉信俊が參りたるをも知られけれ。傍なる壁には、「三尊來迎、便あり。九品往生、疑なし」とも書かれたり。このかたみを見給ひてこそ、さすが、欣求淨

土の望もおはしけりと、限なきなげきの中にも、聊かたのもしげには宣ひけれ。

その墓を尋ねて見給へば、松の一簇ある中に、かひがひしく、壇を築きたることもなく、土の、少し高き所に向ひ、少將、袖かきあはせ、生きたる人に、ものを申すやうに、泣く泣くかきくどきて、申されけるは、「遠き御守とならせおはしましたることをば、嶋にても、かすかに傳へ承って候ひしかども、心に任せぬ憂き身なれば、いそぎ參ることも候はず。成經、かの嶋に流されて後の便なさ、一日片時の命もありがたくこそ候ひしかども、さすが、露の命は消えやらで、この二年を送りて、今召し還さるるうれしさも、さる事にては候へども、父大納

言の、まさしく、この世に渡らせ給はむを見參らせて候はばこそ、さすが、命の長きかひも候はめ。これまでは急がれつれども、今日より後は急ぐべしとも覺えず」とて、かきくどきてぞ泣かれける。まことに、存生の時ならば、大納言入道殿こそ、いかにとも宣ふべきに、生を隔てたるならひほど、恨しきことはなし。苔の下には、誰か答ふべき。ただ、嵐に騷ぐ松の響ばかりなり。

同じき三月十六日、少將、鳥羽に、明けてぞ著き給ふ。故大納言殿の山莊、すあま殿とて、鳥羽にあり。それに立ち寄り見給へば、住み荒して、年經にければ、築地は在れども、おほひもなく、門はあれども、扉もなし。庭に立ち入り見給へば、人迹絶え

て、苔深し。池のほとりを見まはせば、秋の山の春風に、白浪、頻に織りかけて、紫鴛白鷗逍遙す。興ぜし人の戀しさに、ただ盡きせぬものは涙なり。家はあれども、欄門破れて、蔀遣戸も、絶えてなし。「ここには、大納言の、とこそおはせしか、この妻戸をば、かくこそ出で入り給ひしか、あの木をば、みづからこそ植ゑ給ひしか」などいひて、言のはにつけても、ただ、父の事をのみ、戀しげにこそ宣ひけれ。

秋の山　鳥羽にあり。

紫鴛白鷗云云　本朝文粹、源順、「東願亦有二林塘之美一、紫鴛白鷗逍遙於朱檻之前一」。

三月、中の六日なれば、花は、いまだ、なごりあり。楊梅桃李の梢こそ、折しり顔にいろいろなれ。昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや。少將、花のもとに立ち寄りて、

桃李不言云云　菅原文時の作。

桃李不レ言ハ春幾暮ヲ、煙霞無シレ迹昔誰カ栖ミシ。

故里の、花のものいふ、世なりせば、
　いかにむかしの、ことを問はまし。

故里の云云　後拾遺集、出羽辨の歌。

この、古き詩歌を口ずさみ給へば、康賴入道も、折ふし、あはれに覺えて、墨染の袖をぞ濡しける。更け行くままに、荒れにたる宿のならひとて、古き軒の板間より洩る月影ぞ、隈もなき。さてしも、あるべきことならねば、迎に、乘物どもつかはして待つらむも、心なしとて、少將、泣く泣く、すあま殿を出でて、都へ歸り上られけり。人人の心のうち、さこそ、うれしくも、また、哀にもありけめ。

康賴入道が迎にも、乘物はありけれども、今更、名殘の惜しきにとて、それには乘らず、少將の車の尻に乘りて、七條河原

までは行き、それより行き別れけるが、猶行きもやらざりけり。花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が、一村雨の過ぎ行くに、一樹の蔭に立ち寄りて、別るるなごりもをしきぞかし。況や、これは、憂かりし嶋のすまひ、船の中、波の上、一業所感の身なれば、先世の芳緣も淺からずや思はれけむ。

少將は、もとの如く、院に參らせ給ひて、宰相の中將まで上り給ふ。康賴入道は、東山雙林寺に、わが山莊のありければ、それに落ち著きて、まづ、かくぞつづけける。

ふるさとの、軒の板間に、苔むして、
おもひしほどは、洩らぬ月かな。

やがて、そこに籠居して、憂かりし昔を思ひやり、寶物集と

院　後白河院。

寶物集　七卷。佛法を寶とすることを記せり。

いふ物語を書きけりとぞ聞えし。（平家物語）

二一　比良の山風

花の歌とて、よみ侍りける。　左近中將良經

さくらさく、比良の山風、ふくままに、
花になりゆく、志賀のうらなみ。

擣衣　源俊賴朝臣

松かぜの、おとだに秋は、さびしきに、
ころもうつなり、たまがはの里。

心のほかなることありて、知らぬ國に
侍りける時よめる。　平康賴

玉川　攝津國三嶋郡にありとぞ。

さつまがた、沖の小嶋に、われありと、
おやには告げよ、八重のしほ風。

月の歌十首よみ侍りける時。　藤原家基

さ夜千鳥、ふけひの浦に、おとづれて、
ゑじまがいそに、月かたぶきぬ。

（千載和歌集）

ふけひの浦　和泉國泉南郡。

花のうたとて、よみ侍りける。　西行法師

吉野山、こぞのしをりの、みちかへて、
まだ見ぬかたの、花をたづねむ。

關路花を　宮内卿

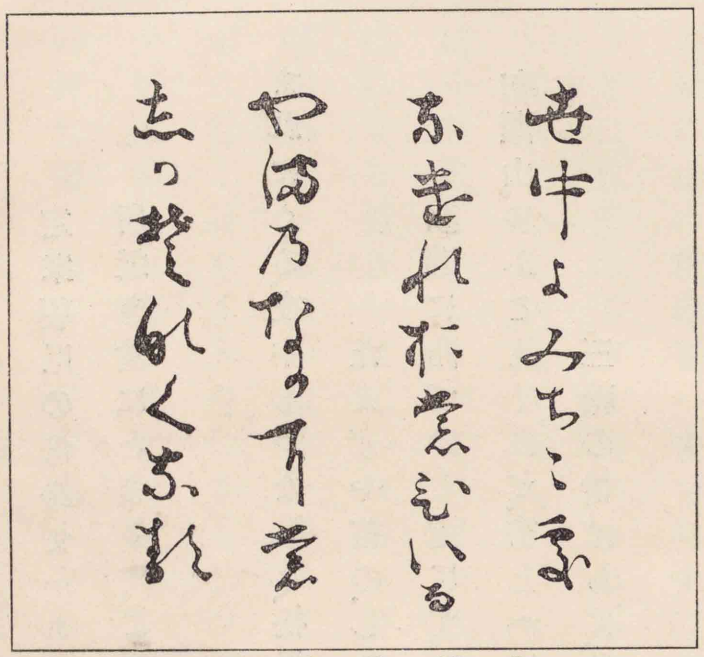
あふさかや、木末の花を、ふくからに、
あらしぞかすむ、せきの杉むら。

百首歌よみ侍りけるに。　藤原定家朝臣

見わたせば、
花も紅葉も、
なかりけり、
浦のとまやの、
あきの夕ぐれ。

湖上冬月　藤原家隆朝臣

志賀の浦や、遠ざかり行く、浪間より、
志賀の浦　近江琵琶湖の西南岸。



藤原定家書

こほりていづる、ありあけの月。

定家朝臣の母身まかりて後、秋ごろ、墓所近き堂にとまりて、よみ侍りける。

皇大后宮大夫俊成

まれにくる、夜半もかなしき、松風を、たえずや苔の、したにきくらむ。

初瀬に詣でける道にて。

禪性法師

初瀬山、ゆふこえくれて、宿とへば、三輪の檜ばらに、秋かぜぞふく。

（新古今和歌集）

初瀬山、三輪　初瀬山は大和國磯城郡にて、長谷寺あり。三輪も同郡。

二三　落花の雪

こは元弘元年七月、藤原俊基の東下りの條なり。

落花の雪に　新古今集、俊成「又や見む交野のみのの櫻狩花の雪ちる春の曙」。

紅葉の錦　拾遺集、公任、「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦著ぬ人ぞなき」。

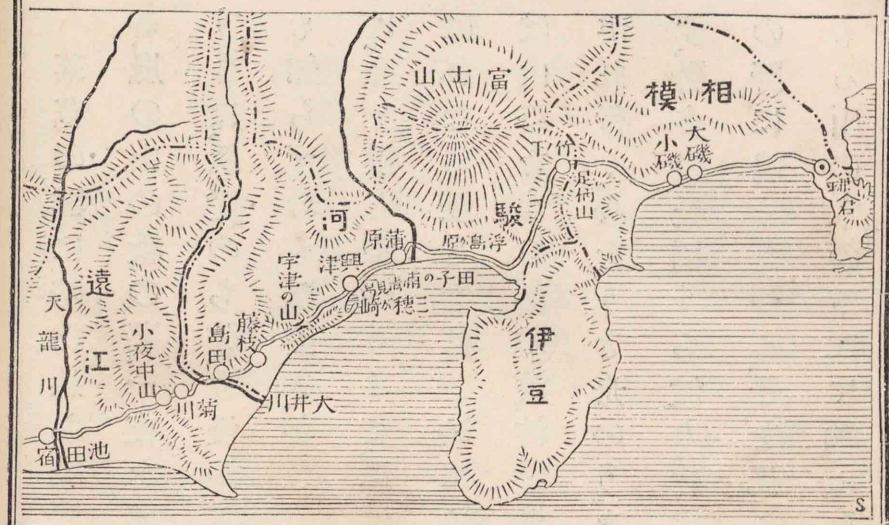
世をうねの野に　古今集、詠者不詳「近江より朝立ちくれば、うねの野にたづぞなくなる、あけぬこの夜は」。

時雨もいたくもる山

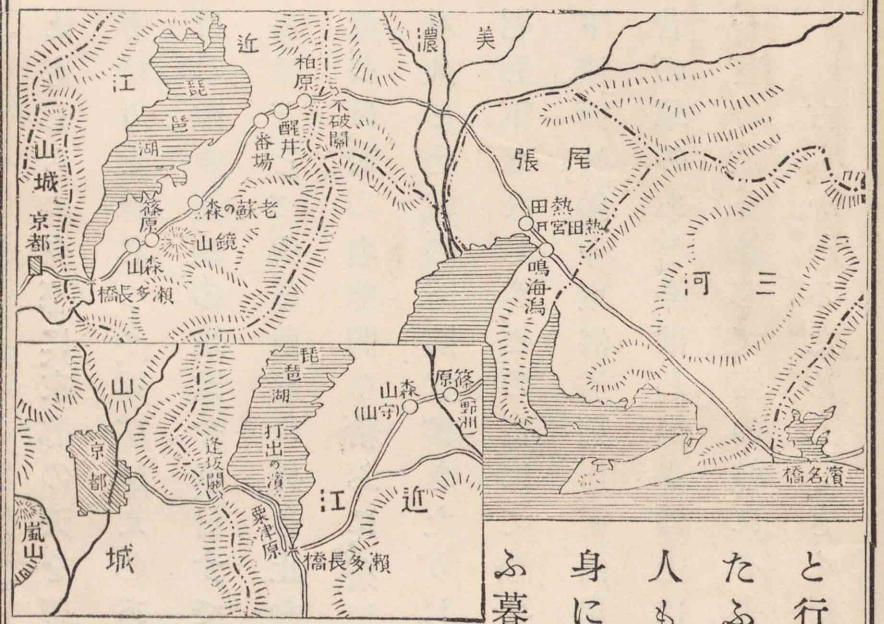
落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寢となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、わが古里の妻子をば、ゆくへも知らずおもひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限とかへりみて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。憂きをばとめぬあふ阪の、關の清水に袖沾れて、末は山路をうち出の濱、沖を遙に見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうきしづみ、駒もとどろと踏みならす、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたくもる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、笹わくる

古今集、貫之、「白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり」。

潮干に今や新古今集、秀能、「さよ千鳥聲こそ近くなる海潟傾く月に汐やみつらむ」。



道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙にくもりて見え分かず。物をおもへば夜のまにも、おいその森の下草に、駒を駐めてかへりみる、故郷を雲やへだつらむ。番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れ果てて、なほもるものは秋の月、いつかわが身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏し拜み、潮干に今やなるみ潟、かたむく月に道見えて、明けぬ暮れぬ



と行く道の、末はいづくととほたふみ、濱名の橋の夕潮に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著きたまふ。

旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、さやの中山越え行けば、白雲道をうづみ來て、そこ

西行法師（一七七八年―一八五〇年）

命なりけり　新古今集、「年をへてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」。

南陽縣の句　藤原宗行の作。菊水のことは、風俗通に、「南陽酈縣有二甘谷一、谷中水甘美、上有二大菊一、落レ水從レ山流下、得二其滋液一、谷中人家、飲二此水一、上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者則爲レ夭」。

ともしらぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけり」と詠じつつ、再び越えしあとまでも、羨しくぞ思はれける。隙ゆく駒の足はやみ、日すでに亭午に上れば、乾飯進むるほどとて、輿を前庭に舁き止む。轅を敲きて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿、關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、「昔南陽縣菊水、汲二下流一而延レ齡、今東海道菊川、宿二西岸一而終レ命」と書きたりし、遠き昔の筆のあと、今はわが身の上になり、哀やいとど増りけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古も、かかるためしを、きく川の、おなじ流に、身をやしづめむ。

龜山殿　山城國葛野郡嵯峨なる龜山の離宮。

夢にも人に　伊勢物語に、上句「駿河なるうつの山べのうつつにも」とあり。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夢と、なりぬと思ひ續け給ふ。

嶋田藤枝にかかりて、岡べの眞葛うら枯れて、ものがなしき夕暮に、宇都の山べを越え行けば、蔦楓いと繁りて、道もなし。昔、業平の中將の、すみかを求むとて、東の方へ下りしに、「夢にも人に、あはぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひしられたり。清見潟を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津蒲原うちすぎて、ふじの高嶺を見給へば、雪の中よりたつ

上なき思　新古今集、家隆「富士の根の煙はなほも立ちのぼる上なきものは思なりけり」。

煙、上なき思にくらべつつ、明くる霞に松見えて、浮嶋が原を過ぎ行けば、しほひや淺き舟見えて、下り立つ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。（太平記）

二三　故事二則

一、塞翁の馬

昔、唐に、塞翁といふものあり。かしこく強き馬を持ちたり。これを、人にも貸し、われも使ひつつ、世をわたる便としけるほどに、この馬、いかがしたりけむ、いづちともなく失せにけり。聞きわたる人、いかばかり歎くらむとて、とぶらひければ、「悔しからず」とばかりいひて、つゆ歎かざりけり。人怪しと思ふほどに、この馬、同じきさまなる馬を、多くゐて來にけり。いとありがたきことなれば、親しき疎き、喜をいふ。かかれども、また、「喜しからず」といひて、これをも驚くけしきなくて、この馬、あまたを飼ひて、さまざまに使ふ間に、翁が子、今來つる馬に乘りて、落ちて、右の肘をつき折りにけり。聞く人驚きあざみてとぶらふにも、なほ、「悔しからず」といひて、氣色も變らず、つれなく、同じさまに應へて過ぎけるに、その頃、俄に、國に、軍おこりて、兵を集められけるに、國中、さもある者、殘なく出で

て、皆、死にけり。この翁の子、片はなるによりて洩れにければ、片手は折れたれども、命は全かりけり。これ、賢きためしに申し傳へたり。

今も、よき人は、毎事うごきなく、心輕からぬは、この翁が心に適へるなどぞ見ゆる。内外典に教ふる所、皆、人の心をもつべき樣なり。昔より、よき名をもたて、惡しきためしにもいはるる、只、心一つのいたす所なり。（十訓抄）

二、知音

伯牙と鍾子期とは、琴の友なりけり。鍾子先だちて失せにければ、今は、誰にか、琴の音を聞きしられむとて、その絃をはづして、彈かざりけり。元稹と樂天とは、詩の友なりしが、元稹

元稹　唐の詩人。字は微之。元氏長慶集の著あり。

はかなくなりしかば、樂天、その作りたりし詩どもを、三十卷書き集めて、唐の大敎院の經藏にぞ籠めおきける。

遺文三十軸、　軸軸金玉聲、　龍門原上土、　埋骨不埋名。

とは、これを詠みたるなり。樂天、又、ある友に寄する詩にいはく、

交情鄭重金相似、　詩韻清鏘玉不如。

まことに、よき友の交は、何よりも面白かるべし。阮家の、南北の垣をも隔てず、貧しかりしをも恥ぢざりし、いかなることを契りけむ。孟母が、子を思ふ故に、鄰を、三度までかへけるも、友を擇ぶ心、これ、またとりどりなり。友に就きて、斷金、伐木の契などいふことあれども、人、皆口づける上に、こと長ければ

樂天　白居易の字、唐の詩人。その集を白氏長慶集といふ。（一四三三年―一五〇七年）

阮家の云云　新撰朗詠集に、「阮家南北舊來鄰、不隔墻垣不愧貧」。

孟母が云云　孟母三遷のこと、劉向列女傳に出づ。

伐木　詩經に、「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、嚶其鳴矣、求其友聲」。

佐保の河原云云　拾遺集、紀友則「夕されば佐保の川原の霧の中に友まどはせる千鳥なくなり」。

友なし小舟云云　古今集、詠者不詳「ほのぼのと明石の浦の朝霧に嶋がくれゆく舟をしぞ思ふ」。

八橋の云云　伊勢物語に見えたる在原業平の故事。

記さず。山鳥の、鏡に向ひて鳴き、鴻雁の、行をなして飛ぶ、皆、友を思ふ心なり。佐保の河原の霧の中に、友まどはせる千鳥の、夕ぐれの聲、すごくこそ聞ゆれ。友なし小舟、ほのかに漕ぎ行く明石の浦の嶋がくれ、友とする人物の少かりける東路の八橋のわたり、かれも、これも、思ひやられて心細し。（千訓抄）

十二月十九日　平治元年。

光頼　藤原氏。一時に、年三十六。（一七八四年—一八三三年）

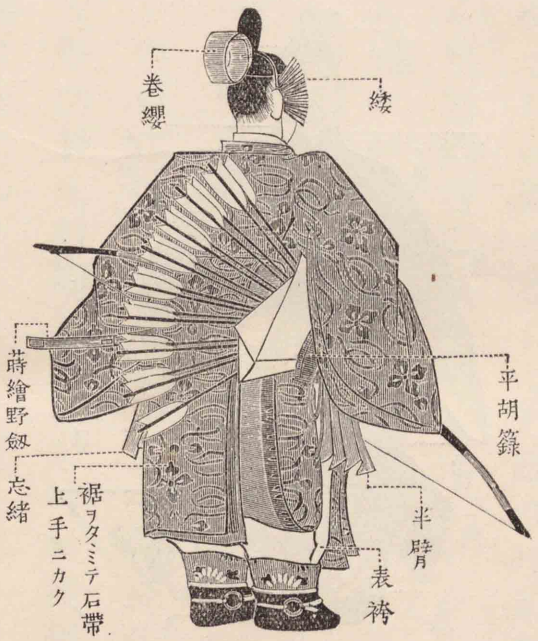
二四　光頼卿の參内

内裏には、十二月十九日、公卿僉議とて、催されたり。勸修寺左衞門督光頼卿、このほどは「信頼卿の擧動過分なり」とて、不參におはしましけるが、「參内して、承らむ」とて、ことに、あざやかに、束帶引き繕ひ、蒔繪の細太刀を、おとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に、腹卷著せ、雜色の裝束に出で立たせ、「自然の事もあらば、人手に懸くな。汝が手に懸けて、光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く置き、その外、清げなる雜色、四五人召し具して、大軍、陣を張りて、處處を固め、守護しけるを、事ともせず、前高らかに追はせて、入り給へば、兵共も、大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて、通し奉る。

信頼　藤原忠隆の子。一時に、年二十七。（一七九三年—一八一九年）

文官束帶

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて、見給へば、信頼卿一座して、その座の上臈達、みな、下にぞ著かれたる。光頼卿、こは、不思議の事かな。人は、いかにておはしましけるに、「今日の御座席こそ、あまりにしどけなう見え候へ」と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上に、むに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相



五位武官束帶

長方
藤原氏。一時に、年二十。（一八〇〇年—一八五二年）

母方の舅

顯頼
- 光頼
- 惟方
- 女（忠隆室）
- 信頼

ずと著き給ふ。光頼卿は、信頼卿のためには、母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、ことに畏れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、ふしめになりて、色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿、下重の尻引き直し、衣紋繕ひ、笏取り直し、氣色して、「今日は、衛府督が一座すと見えて候ふ。召に參ぜざらむ者をば、死罪に行はるべしと承りて、參内するところなり。そもそも、何事の御諚ぞ」と問ひけれども、信頼卿、物も宣はず。著座の公卿も、一言の返答なかりければ、まして、僉議の沙汰もなし。程經て、つい立ちて、「悪しう參って候ひけり」とて、しづしづと歩み出でられけり。

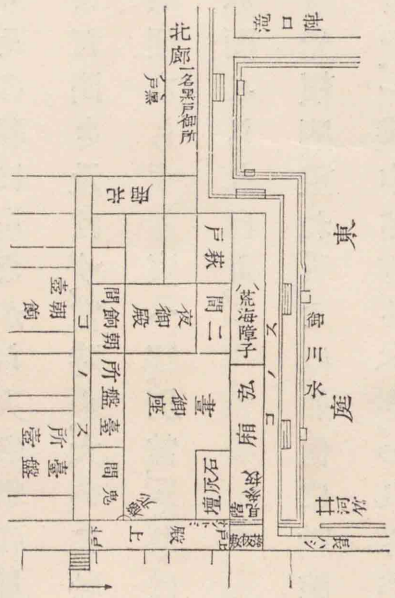
庭上に充ち滿ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれ、この

頼光　滿仲の長子、英武驍勇世に冠たり。（一一六八一年）

頼信　頼光の弟、驍勇を以て稱せらる。（一六二八年―一七〇八年）

殿は、大剛の人かな。さんぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衞門督殿の座上に著く人、一人もおはしまさざりつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、いささかも、臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として、合戰せば、いかばかりかたのもしからむ」と申せば、傍なる者、「むかし、頼光、頼信とて、源氏の名將おはしましき。その頼光を打ち返して、光頼と名告り給へば、これも、剛にましますぞかし」といへば、また、傍より、「なぞ、その頼信を打ち返して、信頼と附き給ふ右衞門督殿は、あれほどの臆病におはします」といへば、「壁に耳、天に口といふことあり。おそろし、おそろし。聞かじ」といひながら、みな、忍笑に笑ひけり。

惟方　時に、年三十五。（一七八五年―）



光頼卿、かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板、高らかに踏み鳴して、立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も、死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人、みな、當時の有職、然るべき人どもなり。その内に入らむこと、甚だ面目なるべし。さても、

少納言入道
藤原信西。（一一八一九年）

神樂岡
山城國愛宕郡。

勸修寺内大臣
藤原高藤。（一四九八年—一五六〇年）

三條右大臣
高藤の子定方。（一五三三年—一五九二年）

先日、右衞門督が車の尻に乘りて、少納言入道が首實檢のために、神樂岡へ向はれしことは如何。以ての外、然るべからざる擧動かな。近衞大將、檢非違使別當は、他にことなる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふこと、先蹤も、いまだ聞き及ばず、當時も、大いに恥辱なり。就中、首實檢は、甚だ穩便ならず」と宣へば、別當「それは、天氣にて候ひしかば」とて、赤面せられけり。

光賴卿、重ねて、「こは、如何に勅諚なればとて、いかで、存ずる旨を、一議申さざるべき。われらが曩祖、勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君、すでに十九代、臣、また十一代、承り行ふ事は、みな、これ德政なり。一度も、惡事に從はず。當家は、させる英雄にはあらざれども、ひとへに、有道の臣に伴ひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より、今に至るまで、人にさしもどかるるほどの事はなかりしに、御邊、始めて、暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は、熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉、紀伊、伊賀、伊勢の家人等待ち受けて、大勢にてぞあんなる。信賴卿がかたらふ所、若干ならじ。平家の大勢押し寄せて、攻めむには、時刻をや廻すべき、もしまた、火などを懸けなば、君も、いかでか、安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらむだにも、朝家の御歎なるべし。如何に、いはむや、君臣ともに、自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、こ

英雄
英雄家の略。

主上　二條天皇。
上皇　後白河上皇。

の時にあるべし。右衞門督は、御邊に、大小事を申しあはすとこそ聞ゆれ。相構へて、相構へて、隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて、主上は、何處におはしますぞ」、「黑戸の御所に」、「上皇は」、「一本御書所に」、「內侍所は」、「溫明殿に」、「劍璽は何處に」、「夜のおとどに」と、左衞門督、次第に尋ね給ひければ、別當、かくぞ答へられける。また、「朝餉の方に、人音のし、櫛形の穴に、人影のしつるは何者ぞ」と宣へば、「それには、右衞門督住み給へば、その方ざまの女房などぞ影ろひ候ふらむ」と申されければ、光賴卿聞きもあへず、「世のなかは、今は、かくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には、信賴住み、君をば、黑戸の御所に遷しまゐらせたり。末代なれども、さすがに、日月は、いまだ、地に墮ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は、王法を、如何に守り給ひぬるぞ。異國には、かやうの例ありといへども、わが朝には、いまだ、かくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな」とて、のろのろしげに、憚るところなく口說き給へば、惟方は、人もや聞くらむと、すさまじげに立ちたりけり。光賴卿、且は悲しくて、「われ、如何なる宿業によりて、かかる世にうまれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらむ。昔の許由にあらねども、今の內裏の有樣を聞かむ輩は、耳をも、目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信賴の座上に著かせられし時は、さしもゆゆしく見えたまひしが、君の御事を悲みて、打ち萎れてぞ出でたまひ

ける。（平治物語）

二五　奈良時代の歌平安時代の文

三韓を經て、輸入し來れる支那の文明は、推古朝以後は、直接に、かの土より傳來することとなれり。聖德太子は、儒佛二教を以て、政治道德の方針を定め給ひ、爾後、頻に、新開化を容れて、遂に、大化改新の政となり、大寶令の制定となれり。而して、當初の建築、彫刻、繪畫等が、殆ど、外來の形式を襲へるが如く、文學も、亦、六朝以後の詩賦文章を、その儘摸作するに至れり。詩は、早く、弘文天皇、大津皇子等の御作を傳ふるを以て見れば、萬葉集歌人の先輩たる柿本人麻呂が、なほ嬰兒たりし

六朝　吳、東晉、宋、齊、梁、陳。

大津皇子　天武天皇の皇子。（一三四六年）

柿本人麿　持統、文武の朝に仕ふ。

時において、既に流行し始めしなり。萬葉集の和歌が、その思想において、形式において、間接直接に、支那文學の影響を蒙れるは、當然の結果といはざるべからず。

萬葉集中、最も著きは長歌なりとす。抑、上代の文學として、祝詞は、古來の舊辭を列ね、傳說を述べて、間、數百言を聯ねたるを、今や、人麻呂等は、民族共同の祝詞を以て、直に、これを、箇人的抒情歌の上に應用し、大いに、その詩形を擴大することを得たりしなり。啻に、その詩形の擴大せしのみならず、祝詞中に含有せられし敬神崇祖の精神も、亦、よく歌ひ出されしなり。おほよそ、萬葉集の長歌は、その末に、短歌を附す。これを反歌といふは、支那詩賦の形式によるものにして、或は、長歌

を稱して賦といひ、短歌を稱して絶とさへいへり。柿本人麻呂、山部赤人等は、純粹なる國民精神を歌へること多けれども、山上憶良に至りては、儒教佛教の思想を詠出せるもの多し。要するに、支那文化の影響を受けたる、一般文運の進歩は、一方において、純國文學の發達を促したるに外ならず。但、萬葉集中には、詠者不詳の歌多し。多くは、古來、人口に膾炙せし歌什を集めたるものにして、眞に、國民の聲といふべく、これ等は、支那文化の影響の外に在るを以て、却って、その趣味の津津たるを覺ゆ。

山部赤人　聖武帝の頃の人。柿本人麿と名を齊うす。

山上憶良　大寶中入唐し、聖武帝の時筑前の守となる。（一三二〇年―一三九三年）

平安時代に至りて、平假名の使用、始めて、自由になれり。茲において、韻文としての和歌、散文としての物語は、互に、相前後して、著き發達を成し、わが模範文學を大成せしむることを得たり。而して、和歌の發達と、これに對する翫賞とは、その他の文學の根柢をなしたるが如し。當時の朝臣は、專ら、支那の詞賦を學習せしが、和歌は、古來の純國民的文學として、相伴ひて行はれしのみならず、女子は、專ら、和歌を翫べり。

伊勢物語、大和物語は、歌を主とせる、種種の說話を集めたるもの、卽ち歌物語なり。伊勢物語は、業平の事蹟を以て一貫せしが故に、業平物語、業平日記の如き觀あれども、その性質は、全く、大和物語と同じ。もし、かくの如き種種の境遇を、わが一身の經歷に繫がんか、卽ち、日記となり、もし、これを總合し、種種の人物を假りて、脚色を施さんか、卽ち、物語となる。故に、

伊勢物語　二卷。作者不詳。

大和物語　二卷。作者不詳。

蜻蛉日記　八卷。藤原道綱の母の作。
和泉式部日記　一卷。
紫式部日記　二卷。
宇津保物語　二十卷。物語の最も古きもの、作者不詳。
落窪物語　四卷。作者不詳。
狹衣物語　八卷。大貳三位の作。

平安時代の女流文學たる物語、日記は、歌物語より轉化し、分岐して發生せるものに外ならず。歌物語の實事談は、日記の經歷談を生み、歌物語の假構的分子は、やがて、假構的物語を産出せり。日記には、蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記等あり。物語には、宇津保物語、落窪物語、源氏物語、狹衣物語等を、最も著明なるものとす。

源氏物語、五十四帖、その脚色、整然として紊れず。各種人物の性格は、明瞭に發揮せられ、宮中に出入し、年中行事に參加し、虚榮と富貴とにあくがれし、上流の搢紳貴女は、最もあらはに描寫せられたり。源氏の大作たる所以は、亦、その自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點に在り。人事と自然とを融合せる詩的思想は、ここに至りて、最大の發達をなせるものといふべし。その文冗長にして詳細、上古文の簡朴にして、莊重なる點は見るべからずといへども、嫋嫋として、風に靡く女郎花の如く、柔輭艶麗、正に、その内容に恰當せり。

枕草子　十二卷。清少納言の作。

枕草子は、歌人として、自然と人事とを觀察せる隨筆なり。春秋の景色、草木禽獸に至るまで、和歌の題目となるべきものを擧げ、山河を始め、地名物名、いづれも、古歌によりて、その興味を聯想すべきものを採り、およそ、その名稱の、歌に入るべきものを擧げ來つて、その、愛すべきをいへるが如き、全く、歌人として、天地萬物を觀たるなり。その著眼の奇警は、その句法の輕妙と相竢ちて、千古不朽の文辭を成せり。忽にして

人事、忽にして自然、變化錯綜の妙味は、句法の上にも、内容の上にも、これを認め得べく、歌人が、一つの題詠に際して、右往左往に、詩想を馳する概あるを見る。

平安時代初期の歌物語は、一變して、日記となり、小說的物語となり、再變して、歷史物語と成れり。日記の或ものは、自己見聞の事實を記して、全く敍事的なるものあり。小說的物語は、宮中を中心として、常に、朝廷の行事を漏さず。その一轉して、歷史を記すに至りたるは、當然の推移といふべし。歷史物語には、榮華物語と大鏡とあり。藤原氏の歷史を敍して、道長の全盛時代を寫せり。大鏡が、まづ、帝王の本紀を揭げ、次に、攝關の列傳を揭げしが如きは、全く、支那の紀傳體の歷史の體

榮華物語　四十一卷。作者不詳。宇多帝より堀河帝まで、凡二百餘年間のことを記す。

大鏡　八卷。藤原爲業の作。文德帝の嘉祥三年より、後一條天皇の萬壽三年までの事を記す。

裁を襲へるなり。（芳賀矢一の文による）

修訂

中等國語讀本卷八

終

明治四十一年一月十日 文部省檢定濟 中學校用 中國語科

明治四十四年十月十四日修訂印刷
明治四十四年十月十八日修訂發行
明治四十五年一月五日修訂再版印刷
明治四十五年一月八日修訂再版發行

不許複製

著者 故落合直文
相續者 落合直幸
補修者 文學博士 萩野由之
補修者 文學博士 醫學博士 森林太郎

修訂中等國語讀本（全十冊）
定價 各卷金貳拾五錢

發行兼印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹一平

發行所 東京市神田區錦町一丁目 【長電話本局二四三八番】 明治書院 （振替貯金口座四九九一番）